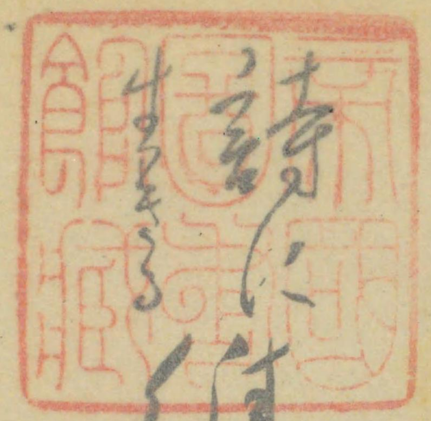
578-328
1200501520828

214



參考書

坂江秀雄著

讀徳新參場者

坂口秀雄著

昭和五九・三・四

878-328

自序

茫々たる宇宙は如何に始まつて、如何に終らうとするのか。秩序といふものが有るかの如く、また無いかの如く、轉々として休止する所はない。この考からすれば、宇宙の諸現象は何時でも過渡時代的な現象である。

我が日本帝國の創立時代は、天照大御神時代としてよからうか、神武天皇時代としてよからうか。少くとも、それより後今日までは何時も過渡時代であつた。

思ふに、明治維新時代は我が日本帝國史上における最も重要性に富んだ過渡時代であつた。けれども、それは日本帝國を堅實に蘇生せしめる復古的重要性の時代であつたのである。その過渡時代の重要性を眞に自覺的に重要視して、猛烈に獻身的に活動したのは、如何なる人々であつたか。現代の過渡時代としての特性は、如何なる人々によつて凝視せられつゝあるか。

現代の我が國民思潮は混沌を極めて居る。その中には未來派的な過渡期を夢想しつゝ活動して居る者も尠いとは言へない。之を恐しい危險性な過渡時代の現象とするならば、かゝる現代國民のすべてに對して、維新當時の國民的に健全であつた自覺的活動者の精神と活動ぶりとを今の各自の精神と活動ぶりとの上に參酌せしめることは、極めて緊要だと言はなければならぬ。

私は此の意味において此の拙著を公にする。私は曩に是と同じ目的で『幕末哀史』といふ小著を公にした事がある。本書は其の姉妹篇である。

昭和五年八月廿四日亡き母の十六回祭の朝

堀江秀雄

目次

第一　明治新天地の大旋風……一

第二　大旋風の中に奔騰した男性女性……二三

（一）雲井龍雄……二四

（二）林櫻園……四三

（三）大國隆正……五九

（四）江藤新平……一〇三

（五）木戸孝允……一二三

（六）西郷南洲……一四〇

（七）大久保利通……一五二
（八）岩倉具視……一六四
（九）三條西季知……一九一
（一〇）三條實美……二〇九
（一一）勝　海舟……二三五
（一二）高橋泥舟……二四五
（一三）伊藤博文……二七〇
（一四）佐々木高行……二八四
（一五）大鳥圭介……三一八
（一六）乃木希典……三三九

（一七）村岡矩子……三七九
（一八）紅蘭女史……三八二
（一九）大橋卷子……三八八
（二〇）黑澤登幾子……三九三
（二一）有村蓮壽尼……四〇〇
（二二）稅所敦子……四〇四
第三　國民思想の變潮……四一五

—（をはり）—

第一　明治新天地の大旋風

花のやうな明治維新の天地は開かれたが、恐しい大旋風は吹き荒れて居た。この大旋風は幕府衰亡時代から吹き續いて居たのである。

井伊大老らが無理やりに米國と修交條約を訂し、續いて魯蘭英佛の各國とも條約を結んだので、井伊大老の不都合を謗議するものが百出し、一橋慶喜をはじめ、尾張慶恕も、水戸慶篤も、同じく齊昭も、松平慶永も俄に江戸城に登營して、大老宿老を詰責されたのみならず、有識の士は勿論、浮浪の徒まで大老の專權を咎め、憤惋切齒して、各處に奔走横議するものが頗る多くなつた。これが大旋風の兆である。

そこで、直に朝廷から勅書を幕府及び水戸、尾張、越前、加賀、薩摩、肥後、筑前、安藝、長門、因幡、備前、阿波、土佐に下された。これは内憂外患が並起つたので、深く大御心を惱まされて、大老、閣老、その他三家、兩卿、外樣譜代の列藩と群議評定し、國内の治平を計り、外夷の

侮を禦がうとするのであつた。

この勅書は安政五年八月八日に發せられたものであるが、水戸へは十七日に着き、幕府へは十八日に着いた。各藩の家々では、或は幕府へ訴へ出でたのもあり、或は默して訴へないものもあり、或は尾州の如く開封だにせず直に火中に投じたのもあり、その處置はまち〳〵であつたが、水戸家では處置に迷うて、幕府の宿老たる太田備後守と間部下總守とを其の屋敷に招き、この勅書を示して、諸藩へ廻達するがよいか惡いかを問はれた。太田備後守も、間部下總守も速斷いたしかねて、井伊大老と相談してから何れとも御返事に及びませうと退去したが、やがて廻達してはならぬと答へて來た。そして、この勅書に就いて京都の所司代たる酒井若狹守から知らせて來た所によれば、この勅書は關白九條尙忠公が知らぬ間に作られたものだといふのだ。

ちと雲行が變になつて來た。幕府は所司代からの報知を得てからは、この勅書を眞の勅書と視なさず、この勅書を作つて出したのは誰であるか、この勅書を請ひ奉つた者は誰であるか、これを嚴重に詮議する事に決した。この旨を含んで、安政五年九月三日に宿老間部下總守詮勝は疾風の如く上京した。天の一角に黑雲が油然として湧き出したのである。

そも、間部下總守は如何なる使命を帶びて上京したのであるか。下總守が上京したのは、幕府の代表として、朝廷に對して關東の情實を陳述し、朝廷からの責問を辯解する筈であつたのである。然るに、下總守が京都に着いて旅館妙滿寺に入るや、病と稱して出でず、たゞ關東は國家の安寧を計るが爲に條約に調印したとの一語を發したばかりで、何等の陳辯に力める所もない。却つて慷慨憂國の士の行動を探索偵察するために鷲の如き眼を見はつて居る。

はじめ間部下總守が江戸を出發しようとする時、伏見奉行内藤正縄が下總守に對して、公卿にして事を爲す者は二三人だから、諸藩士の京都に出入するのを禁じ、一方に處士と諸太夫とを捕へて、其の手足を絕つならば、公卿の如きは與し易いものだ」と言つた。また紀州の國家老水野土佐守も下總守に對して「朝廷が外國の事を以て幕府を責める其の根源は水戸の老公に在る。京都を探索するならば、かならず其の證據が手に入るであらう。之を以て老公を處分してしまふならば、公武の間柄は直に圓滿に解決するであらう」と言つた。之を聞いて下總守は大に微笑を漏したと傳へられて居る。

果然、下總守は彼の勅書の事に關係したものを捕へはじめた。また尊王攘夷を唱へる者を捕へは

じめた。その捕へられたのは、水戸家の京都留主居たる鵜飼吉左衛門父子を手始として、鷹司家の家臣小林民部、兼田伊織、三國大學、西園寺家の家臣藤井但馬守、久我家の家臣春日讃岐守、それから浪人繪師なる浮田一蕙、同人の子息松庵、浪人儒者なる賴三樹三郎、池田大學など數十人で、一網打盡的に悉く關東へ檻送された。

これらの囚人は、安政六年の正月江戸に着いたので、方々に分け預けられた。鵜飼吉左衛門、浮田一蕙、同じき松庵、池田大學は松平飛驒守に、鴻飼幸吉、小林民部、兼田伊織、三國大學は榊原式部大輔に、飯島左馬、藤井但馬守、森寺若狹守、梅田雲濱は小笠原右近將監に、高橋兵部、伊丹藏人、山田勘解由、賴三樹三郎は阿部伊豫守に、近衛家の老女村岡、信州松本の茂左衛門、源左衛門は松平丹波守に、山科出雲守、丹羽豐前守、若林李權助は加藤出雲守に、春日讃岐守、入江雅樂頭、森寺因幡守は岡部越前守に、六物空萬、富田織部は伊東修理大夫に其れ〴〵預けられた。

かく捕へられたのは、京都に居た者ばかりではなく、江戸でも、その他の處でも怪しいと目星をつけられた者は、みな召し捕へられたので、中島數馬、大沼又三郎、岩本常助、利益院行阿、橋本左内、吉見長左衛門、藤森恭輔、飯泉春堂、日下部裕之進、勝野豊作妻ちか、その子ゆう、筧承

三は差添人に、吉田松陰、成就院信海、飯泉喜内、勝野森之助、同じい保三郎、小網町伊十郎は揚屋に、奥田隼人、太宰清右衛門妻セイ、同人方に同居して居た雷助、奥州の田村八郎は牢獄に投ぜられ、長谷院知順は假牢に、山本貞一郎妻とよは宿預け、神田久右衛門町の源十、三河町の清七、浪人蒲市正は町預けとなつた。

江戸の天地には陰雲が低迷して、雨か風かの來らうとする形勢を示して居る。幕府は寺社奉行松平伯耆守、大目付久貝因幡守、町奉行石谷因幡守、町奉行兼勘定奉行池田播磨守、目付神保伯耆守松平久之允、黒川左仲などを吟味役に命じて、是等の囚人を訊問せしめようとした。幕府の此の際における方針は何處に向けられてゐたのであらうか。評定所に集りたる吟味掛の意向は如何であつたらうか。評定所の留役組頭木村敬藏が言ふ所を聞いて見ると、

今や京囚から沒收した書類を檢するのに、その言ふ所は、いづれも賢明なる將軍を立て外夷の驕傲を挫かうとするにある。これ皆國の爲にするもので、私の爲にするのではない。是等の志士を法廷に引き出して鞫問するが如きは、百害あつて一益もない。その行爲には何等の罪すべきものはないと存ずる。

と言ふのである。寺社奉行板倉周防守、勘定奉行佐々木信濃守などは、忽ち木村敬藏の說に贊成の意を表した。然るに、大老一派の意向は、

近時の天下は水戸前中納言に支配されて居る處が多い。謂はゆる志士の行動も、それから絲を引いて居るものと見られる。それ故に、之を究問訊詰して、東西の關係を審にし、水戸前中納言が人心を惑亂した罪を問はなければならぬ。

といふのにあつた。それに對して、木村は不可を喝破した。

かくの如く水戸の家臣を逮捕して、其の主君の罪を論證せしめようとするのは、德川家の御法則に違反する。御規則には、臣をして君を證せしめず、子をして父を證せしめずとあるではないか。且又、其の家臣を呼び出して訊問して見るとも、家臣たる者が容易に主君の罪を白狀する筈があらうか。

木村敬藏の絕叫する所には、板倉周防守も、佐々木信濃守もます〳〵同意を表した。けれども、木村の主張に對して、町奉行石谷因幡守は贊成しない。

木村氏の言はれる所も一應道理ある樣ではあるけれども、既に人心惑亂の疑ある以上は、之を

嚴重に詰問して、罪ある所は罪ある所とし、その禍根を絕つのが肝要でござらう。

石谷因幡守の此の一言に、木村敬藏も緘默してしまつた。板倉も佐々木も一語を發しない。そこで大老は石谷の議を用ゐるに決した。

幕府は一旦任命した吟味掛を變改した。二月二日に板倉佐々木の職を奪ひ、寺社奉行松平伯耆守を以て板倉に代へ、町奉行池田播磨守を以て勘定奉行を兼ねさせて佐々木に代へた。また木村敬藏をば少普請と爲して差控を命じ、吉田昇太郎をして木村に代らしめた。評定所は大老一派の色彩に塗抹された。戊午の大獄は何如なる決落を見ようとするのであらうか。

戊午の大獄は謂はば幕府の致命傷であつた。戊午は孝明天皇の安政五年である。安政二年十月には江戸に大地震があつて、品川の砲臺が壞れる程の强震で、男女の死傷者無虜七千にも及んだ大騷動であつたけれど、幕府の大勢には何等の影響もなかつた樣であるが、戊午の大獄の判決は幕府の基礎を破壞する程の大震動であつた。

この震動の第一は、安政六年二月二十八日に京都の青蓮院宮に現れた。この日關白九條尙忠から

青蓮院宮に對して、「昨年來關東との御間柄にも拘はり、容易ならぬ御心得違があらせられた。」とて御謹慎あるべき旨仰せ傳へられたので、大和多武峰の塔頭梅量院へ御隱居あらせられたのである。

また同年四月二十八日には左大臣近衛忠熙、右大臣鷹司輔熙、內大臣三條實萬の諸公に解官落飾允許が下つた。これは此の諸公は、豫ねて水藩及び處士の說を朝廷に進め、幕府に謀反の心があるといふ訛傳を信じ、關白尙忠を退けようと謀つたのは、政道を過つたものであるとて、みづから解官落飾を請はれてあつたのが、この日に至つて許されたものである。また同年八月二十八日に至つて大震動が起つた。それは幕府が松平左兵衞督と成瀨隼人正とを上使として、水戸前中納言齊昭に永蟄居を命じたことから始まる。その幕府の言分は、

水戸前中納言殿が國家の御爲筋を仰せ立てられるのは、當然の事であるけれども、御建白の次第を朝廷で御取用がないとて、御家來の者を以て、御見込の筋をいろ〳〵京都へ仰遣され、しかのみならず御養君の儀に就いても、輕き者どもが宮堂上方を取繕ひ、關東が暴政を行うて居る樣に申し成し、人心を惑亂いたさせ、讒奏がましい事どもを行ひ、終には重い敕定を輕いともがらの手で取扱はせ、かつ綸旨を懇願するに至るなど、公武の御確執や國家の大事を釀す譯

合で、容易ならぬ所行である。たとひ御家來の者どもが、御胸中を察して私に周旋した事であるにしても、もと〳〵御心得が宜しくないによつて、此の樣な始末になつたので、公儀に對せられて御後闇い御處置である。そこで、嚴罰をも仰せ出される筈の處ではあるけれども、格別の思召を以て、水戸表に永々蟄居なさるやうに……

といふので、水戸前中納言は差控といふ旨を達せられ、家老中山備前守も同じく差控を命ぜられ、水戸の支族たる松平讃岐守、松平大學頭、松平播磨守には不都合を申渡された。それのみならず昨年の秋このかた評定所で吟味を受けて居た水藩の家老安島帶刀には割腹、茅根伊豫之助、鵜飼吉左衞門には死罪、鵜飼幸吉には梟首、鮎澤伊太夫には遠流、大竹儀兵衞には押込を申渡されたので水戸の面目は丸潰れといふべき悲慘な狀況に陷つた。これで水戸藩士の腸が九回せずに居られようか。

刑罰は全國的に波及した。橋本左內、賴三樹三郎、吉田寅次郎は江戸の北郊なる南千住の小塚原で刑戮の露と化した。鷹司家の諸大夫小林民部、大覺寺の六物空萬、奧州金原田の百姓八郎、松平薩摩守家來日下部伊三次、旗本阿部氏の門客勝野豐作は遠流、久我家の家臣春日讃岐守、御倉小舍

人、山科出雲守、三條家の臣森寺因幡守、松平修理大夫の家來大山正阿彌、酒井雅樂頭の家來菅野謙介、土屋釆女正の家來大久保要、松平豊前寺の家來奥平小太郎、松平讃岐守の家來長谷河宗右衛門は永押込、近衛家の老女津崎村岡、有栖川宮の家臣飯田左馬、下田奉行手付出役の大沼又三郎、飯泉喜内の悴春堂、青蓮院宮の家臣山田勘解由、三條家の臣富田織部、勝野豊作の次男保三郎、豊作の妻チカ、同娘コウは押込、鷹司家の臣三國大學は重追放、青蓮院宮の家來伊丹藏人、三條家の臣丹羽豊前守、同森寺若狭守、儒醫池内大學、一條家の臣入江雅樂頭、吉賀謹一郎の家來藤森恭輔、伊達遠江守の家來吉見長左衛門、信州松本本町の名主茂左衛門、茅根伊太郎の悴力之助、同次男六藏、水戸領百姓黒澤トキは中追放、小林民部の悴小林越前守、鵜飼吉左衛門の子息三人は追放、畫師浮田一蕙父子、浪人蒲市正は所拂、以上は或は八月二十七日に、或は十月七日に、或は十月二十七日に其れ〴〵宣告された。このほか獄中に病死したものは、西園寺家の臣藤井但馬守富小路家の臣山本縫殿、若州小濱の藩士梅田源次郎、僧月照の弟信海などである。井伊大老は、かくの如き暴壓政策を斷行して、一時は威權赫々たる者であつた。

井伊大老が此の暴壓政策を斷行したのは、何の觀る所があるに因つたのであらうか。大老が此の

政策を胸中に描くに至つたのは、その家來たる長野義言、京都町奉行附の與力加納某、九條殿の家來島田左近などの建策に因つたものだと言はれてゐる。この長野義言といふ人物は、井伊家譜代の臣ではなく、もと伊勢の人で、京都に於いて國學を修め、水野土州の招に應じて江戸に來たこともあるが、井伊家に仕へる以前は、『古事記』を講義して、隨分博識だと稱揚されて居たと言はれて居る。その妻瀧子と共に詠歌を能くし、京都に寓するに至つて、歌を以て搢紳の間に出入して居たがこゝにまた一人長野に妾があつて、これが機密に與つたとも言はれて居る。この女はもと祇園の妓女で、すこぶる美貌で敏慧であつたが、その妓女であつた時に、堂上方にも召されて、御酒宴などの折は九條關白殿にも伺つたこともある緣故を以て、長野の妾となつてからも、その御館に參り、御意に叶つたものか、大小の機密をさへ申し出し得る有樣であつたと、勝海舟の『籬の茨』に記されて居る。大老の背後に、かゝる小人輩が居つて施政の絲を操つて居たとすれば、はなはだ怪しからむ事である。

大老直弼は父直中に十五男五女ある中の十四番に生れた男子であるから、到底大藩の主たるべき望もなく、部屋住の庶子として、彦根第三廓尾末町に閑居し、その居を埋木舍と名づけ、他日の大

機會を期待すべく、修養の日を送つて居た頃もあつた。彼は年少にして新心流の居合術を修め、その蘊奥を極めて、別に一派を創立しようとさへした事もある。弓馬劍槍を修業したのは勿論である。石州流の茶道の極意を得、また和歌をも深く嗜んだ。その和敬清寂なる情趣を詠んだ歌に、

朝夕に馴れて樂しく聞くものは
　窓のうちなる松風のこゑ
そよと吹く風に靡きてすなほなる
　すがたを映す岸の青やぎ

などあるのを見れば、直弼の風格を想望することが出來る。直弼の長野義言に交を結んだのも、其の間の事である。義言が彦根に來て直弼に謁したのは、天保九年十二月二十日で、藩醫三浦尙之を介して、始めて埋木舍に伺候した。意氣投合した彼等は、文事を談じて夜を徹するに至つた。直弼の埋木舍時代は彼が心身を最も修養した時代で、彼が生涯に大影響あるべき基礎を固めたのが此時代にあつたものである。この時代に長野義言との交遊によつて暗示を得た事の尠くなかつたのも勿論で、決して修辭添削の末節ばかりではなかつたのである。兩人の交遊は直弼が藩主となり大老と

なつた後にも益々濃やかなものがあつた。けれども、直弼の外交條約締結や安政大獄を義言らの進言に基因するものと信ずるが如きは、思はざるの甚しきものである。

直弼の英斷は天下の大勢を察知し、我が國の前途を思ふ至誠から出たものであるが、この間彼の政策を協賛したのは、幕府の宿老堀田備中守、勘定奉行川路左衛門尉、目付岩瀨肥後守らであつた。海外の情勢を知つてゐる者は、幾分その脅威を感じての事とは言へ、井伊大老の英斷に胸臆の清爽なるを覺えたのであつた。

けれども、當時の天下には世界の大勢に通じて居る者が曉天の星よりも少かつた。井伊大老を中心としての幕府の政策には、反對說を叫ぶものが多かつた。殊に戊午の大獄に對しては、激怒する聲が喧しかつた。萬延元年三月三日上巳の節句とて、井伊大老が參賀のために櫻田の邸を發して江戸城に登る飛雪紛々の朝、かねて水戸藩を脫して井伊大老を刺し殺さうと機會を窺つて居た血氣の浪士十數人、この時三々五々路傍に現れ、一聲の小銃を合圖に、白刃を閃して直弼の駕籠を取り圍み、前供に切つてかゝり、後供に切つてかゝり、大老の駕籠を衝きて、薩藩の士有村治左衛門は大老を引き出して其の首を押し切り、大聲に國賊井伊掃部頭を討ち取つたと叫んだ。水戸浪士とい

ふのは、

小姓　佐野竹之助
大番　大關和七郎
小普請　山口辰之介
叔父　廣岡子之次郎
郡方勤　關鐵之介
古内村神官　鯉淵要人
郡方元締　稲田十藏
矢倉方手代　蓮田市五郎
矢倉方手代　森山繁之介

大番　黑澤忠二郎
馬廻三四郎弟　森五六郎
小普請藤介　岡部三十郎
叔父
三郎大夫弟　增子金八
靜神社長官　齋藤監物
銃砲師　杉山彌十郎
郡方同心見習　廣木松之介
鄕士　海後嵯峨之介

の十七人で、外に一人有村治左衛門のみは松平修理大夫の家士である。今や我が國の世界的地位が優秀な時、ロンドン會議に列席して思ふやうに國威を張り得ずに歸朝した若槻全權大使でも、凱旋將軍の如く意氣揚々たるものがあるのに、當時開國の大先覺とは知られなかつた井伊大老の最期こそ、實に憐である。その年の一月直弼が自像の彫刻に題した歌に、

近江の海磯うつ波の幾たびも
　御世に心をくだきぬるかな

とあるのは、彼の好い形見である。彼を以て大久保利通に比較して如何であるか、彼を以て原敬と比較して如何であるか。

さても、江戸の天下は是より急轉しはじめた。文久元年五月に浪士が江戸高輪の東禪寺に於いて英人を傷けたことも、同じ二年正月に浪士が老中安藤信正を坂下門で暗殺しようとした事も、その十二月に品川御殿山で英國公使館を燒討したことも、同じ三年五月に長藩が下關に於いて佛船を砲擊したことも、同じ七月に薩藩が鹿兒島灣に於いて英艦を砲擊したことも、元治元年六月に幕府の新撰組が宮部鼎藏らを京都三條の池田屋に襲擊したことも、同じ年八月に幕府が長州を征伐したことも、翌年また長州を再征したことも、慶應二年九月に勅命を以て幕府の征長軍を停止されたことも頻々で、殊に元治慶應の際は全國的に紛亂を極めた。例へば、元治元年三月には、水戸の田丸稲

之衛門、藤田小四郎、武田耕雲齋らが首唱者となり、天下の危急を救ひ、外人の跋扈を抑へようとして、常陸の筑波山に兵を擧げ、非命に斃れたものが數百人に及んだこともある。この事件は遠島に處せられたものだけでも百人からあつた大事件である。同年四月には、姫路藩の河合總兵衛、河合傳十郎らが勤王論を唱へて、斬首自刃などに處せられた殉難事件があつた。また同年七月には、禁門の變があつて、その際加州藩の世子前田慶寧が幕府の忌諱に觸れ、藩の重臣松平大貳らが斬流の刑に處せられた事件があつた。また同年十月には、絶海孤島の對州でも、大浦和禮、大浦申祿の一派が長州藩の勤王黨と志を通じて活動しはじめたが、勝井黨に妨げられて、慘刑に處せられた内訌があつた。元治が改まつて慶應となつたが、その元年十月には、福岡藩の志士加藤司書、齋藤五六郎、月形洗藏らの擧動が、勤王に急にして、藩政に害ありと認められて、或は嚴刑に處せられ或は屠腹を命ぜられた騒動があつた。同三年十一月には、慷慨悲歌の士が京都の密意を受けて、竹内節齋や西山尚義らの一隊は、野州出流山に義旗を擧げ、兒玉雄一郎や篠崎彦次郎らの一隊は江戸三田の薩摩屋敷に潜伏して、同志が同時に討幕の急先鋒たらうと企てたけれども、早くも幕府の探知する所となつて、擊ち破られた。旋風は卍巴と吹き荒れて來た。

かくの如く政界はその都度に幕府の衰亡を刻々早からしめつゝ、曉闇の路を辿つて居たのである。その暗澹たる間にも、慶應三年正月九日に明治大帝が踐祚あらせられ、その十月十四日に德川十五代將軍慶喜が將軍職を朝廷に奉還するに至つて、我が日本の天地は忽ち曙光に滿ちて來たのである。けれども、まだ烈しい風は吹き止まなかつた。

七百餘年間武威を振つた封建制度は瓦解した。けれども、慶應三年の頃、廟堂に此の跡を引き受けて、能く政局を拾收し得る人があつたか。とにもかくにも、十二月八日には三條實美らの官位を復して京都へ召し還され、翌九日には王政復古の大令を發し、同じ日に總裁、議定、參與の三職を設定して、この大局に當らうとしたのである。總裁には有栖川宮熾仁親王、副總裁には三條實美、議定には仁和寺宮嘉彰親王、山階宮晃親王、中山忠能、正親町三條實愛、中御門經之、德川慶勝、松平慶永、淺野茂勳、山内豐信、島津茂久の十名、參與には、

萬里小路博房　大原重德
岩倉具視　長谷信篤

橋本實梁

は公卿の中から選ばれ、

岩下方平（薩士）　西郷隆盛（薩士）
大久保利通（薩士）　丹羽賢（尾士）
田中輔（尾士）　辻維嶽（藝士）
櫻井元憲（藝士）　久保田秀雄（藝士）
中根師質（越士）　酒井忠温（越士）
毛受洪（越士）　後藤象二郎（土士）
神山君風（土士）　福岡孝悌（土士）

が武士の中から選ばれたので、この武士が大政に參與する事に至つたことと、その武士といふのが薩摩藩、尾張藩、安藝藩、越前藩、土佐藩の五藩士に限られて居たこととは、大に注意されるのである。彼等は鳩首して何事を議し、何事を爲出かさうとしたであらうか。

天下の人心は、この大旋風に襲はれて、頗る惱亂して居た。果して、明治元年正月三日といふの

に、鳥羽伏見の戰が開始された。十日には慶喜征討の大命が下され、間もなく有栖川宮熾仁親王は御身が總裁の重職に在らせられながらも東征大總督の任に就かれた。西郷隆盛は總督軍の參謀であり、大村益次郎は軍務判事であつた。かくて其の四月十一日には久しく德川將軍の根據地であつた江戸城は官軍の手に明け渡された。江戸を東京と改稱されたのは、この年七月十七日で、帝都を東京に奠められたのは、二年三月二十八日である。これより既に六十年、今や千代田城內の老樹は蓊鬱として、皇運の隆昌をことほいで居る。

さても、明治元年の江戸市街は、上野戰爭の硝煙彈雨に破壞された。彰義隊は慘々に打ち負けて潰走した。東北の會津及び二十一藩は突如として攻め寄せたる官軍のために蹂躙されて、頗る痛手を負うた。中にも憐を留めたのは、鶴が城の陷つたのを見て、飯盛山で自害し果てた少年の白虎隊である。箱館の五稜廓に據つた榎本釜次郎や大鳥圭介も、何時まで官軍に對峙する事が出來よう。二年五月八日には歸順して縛に就いた。この場合における德川家の出處進退、旗本八萬騎の態度、東北諸藩の心事などに就いては、今なほ議すべきものが遺つて居る。かの近藤勇や、河合繼之助や横井小楠や、大村益次郎や、雲井龍雄や、廣澤眞臣などの最期に至つては、道德上の觀察は暫く措

き、人をして暗涙を注がしめるものがある。

かゝる間にも、明治の光輝ある新政は樹立を見るに至つた。こゝに光輝ある新政といふ。それは、明治の新政は、平安朝が衰へて鎌倉幕府が樹立されたのとは違ふ。また源氏が滅亡して北條氏が執權政治を創めたのとは違ふ。また鎌倉の北條氏が滅亡して足利氏が室町幕府を建てたのとは違ふ。それらと全然類を異にして、天皇が御親ら天下一統の政治を執らせられるに至つたのである。これを御一新といふ。一新ではあるが革命ではない。八田知紀のいはゆる、

幾十たび搔き濁しても澄み返る
水や皇國のすがたなるらむ

の意である。我が國には外國に見えるやうな革命は斷じてない。今後も其れを有らしめてはならない。

明治元年三月十四日には五箇條の御誓文を發せられ、九月八日には一世一元の制を定められ、二

年六月十七日には諸藩の版籍奉還を承認して、公卿、諸侯を華族として皇室の藩屏とせられ、七月八日には官制を改革せられ、三年九月十日には庶民に姓氏を名乘ることを許可せられ、その十一月十三日には徴兵規則を頒布せられ、四年七月十四日には廢藩置縣を實施せられ、五年八月二日には學制を頒布せられ、その十一月九日に、曆制を改定せられ、神武天皇卽位の年を紀元元年と定められ、同月二十八日には徴兵令を定められるなど、矢繼早に改革を斷行して、民心の一新を策られた。これらの改革は誰の腹案から生み出されたものであるか。

明治維新の際は多士濟々であつた。かの安政戊午の大獄に數多の傑士を喪ふことがなかつたら、更に人豪の府が築かれたであらう。けれども、この明治の大改革にも千慮の一失は免れなかつたに違ない。征韓論の成立せぬに至つた頃から、不平黨が頭を擡げはじめた。佐賀の亂、萩の亂、秋月の亂、熊本の亂、鹿兒島の亂、これらの叛亂に加盟した者といつても、日本人としての精神ある者は、誰か皇室の御稜威に尊崇の念を失ふことがあらう。維新の三傑といはれ、四賢と言はれる程の人々にして、この旋風下に立つ國民の情と意とが何れの方向に在るかを熟察するの明があつて、能く天業を補弼し得たならば、國民をして怨嗟の聲なからしめ、妖霧を攘つて青天を仰ぐか如き、民

心の喜悅を招き來したであらう。それは至難の事であつたが、大旋風の眞只中に活躍した人物も頗る多かつた。就中、三傑とは果して誰か、四賢とは果して誰か。

第二　大旋風の中に奔騰した男性女性

大旋風が吹き荒れた。これには、うるはしい花が狂つたばかりでなく、その花がもぎ落されたばかりでなく、幹の折れたのもあり、根から拔かれたのもある。砂塵は高く颺がり、海浪は飜つて家を倒し、庫を壞し、一家を鏖し、一村を全滅せしめ、一地方を疲弊せしめるに至つたこともある。この大旋風に飜弄せられたものは幾萬か、幾十萬か、幾百萬か。また此の大旋風の中に立つてよく身をかはし、足蹈みしめて倒されずに濟んだ者もあり、全き安全を得たのもある。そのうち特に秀拔な者には、毅然たる英姿を現はして、風伯兩師を叱し去らしめたものもある。風去り雲晴れ月明なる時、これを見れば、活乾坤は多趣多味である。

　　弦にかの大旋風の中に奔騰した人々を拉し來つて、英雄を呼び、豪傑を招き、女丈夫を集め、之を一堂に會せしめるならば、如何に壯快であらう。その互に體驗を語り、精神を告げ合ふ時、之を傍聽する者にして、當年の俊髦を回想して、己が努力勵精の足らないのを愧ぢない者は幾人ぞ。

（一）雲井龍雄

我が日本の文化は、古より大かた西より東へ進みゆく潮勢がある。それ故に、人傑のあらはれることも、西に多くして、東に少い傾かあつた。けれども、奥羽の地は固より秀峯長川少からず、その間に時々豪傑があらはれる。安倍頼時父子の梟雄なる、藤原三代の豪奢なる、佐藤繼信兄弟の忠勇なる、伊達政宗の雄略なる、平田篤胤の篤學なる、佐藤信淵の卓識なる、高野長英の高逸なる、いづれも奇偉なる事蹟を以て、史上に花を咲かせて居るではないか。殊に近來多く人物を輩出して、世の注目を惹いて居るのは、陸中である。辭典編纂家としての大槻文彦、評論家としての新渡戸稲造の兩博士らを別としても、齋藤實、後藤新平、原敬の三氏の如きは、世の毀譽褒貶は兎にも角にも、近代的政治の驍將である。岩手の颯、北上の流、如何に相呼び相應へて、これら俊邁の徒を生み出したるぞ。

昔から深山大澤は偉人を生むと言つてある。岩手山や北上川が偉人を生むならば、吾妻山　最上川もまた偉人を生まねばならぬ。羽前には如何なる人物があるか。米澤侯上杉鷹山は羽前人物史中

の白眉である。城下の興讓館は人物の陶治に努力して居た。鷹山は羽前の產ではないけれども、景勝このかた名だたる上杉家の後を嗣いで、配下の興讓館裡に幾何の人才を世に貢献したであらうか。明治時代人物中の一人なる平田子爵東助は、山縣公爵有朋の姻戚として、長閥内閣に大臣の椅子を占めたこと正に二回、二宮宗の宣傳者として、幾分世の崇敬を受けて居られたけれども、これよりも先に指を屈せねばならぬのは、快傑雲井龍雄である。雲井龍雄とは何者ぞ。

雲井龍雄は、米澤藩士中島惣右衛門の二男で、辰三郎といふ名であつたが、十八歳の頃、同藩士小島才助の養子となつて、小島氏を冒し、後に雲井龍雄と稱し、また遠山翠とも稱して居た。その幼い時、多くの子供と遊び戯れるにも、常には孝悌恭敬にして親切であつたが、一旦怒る時は、猛然として獅子の暴れ狂ふが如く、誰しも之に近づくことが出來なかつた。その一二例を擧げて見れば、ある日龍雄が群童と共に遊んで居たところ、をりしも春風の強い日で、どこからともなく一つの大きな紙鳶が落ちて來た。その地の習慣として、他町村の紙鳶が落ちて來た場合には、直に引裂いて仕舞つて、一時の快を取ることになつて居たものだから、多くの子供は紙鳶の落

見て、爭ひ集つて、之を引裂かうとして居るところへ、紙鳶の持主ら數人が追つて來て、大聲に「引裂くと許さぬぞ。」と叫んだ。群童は其の見幕に辟易して、みな逃げ去つたけれども、龍雄はひとり去らず、「なあに、返すもんか。奴さんたち、これを見ろ。」と言ひながら、たちまち引裂いてしまひにつこと微笑して、「ほしいなら、之を返してくれるわ。」とて。骨だけを突きつけたので、持主も龍雄の暴行を如何ともする能はず、悄々として歸つてしまつたといふことである。また或時友人と爭論したことがあつた。それは、此の地方の方言として、武士の身分をリキ〳〵と呼んだが、それは果してリキ〳〵か、またはレキ〳〵かといふことについて、爭論したのである。龍雄はリキ〳〵だと主張し、友人はレキ〳〵だと固執したけれども、共に子供のことで、眞の意は知らないのだ。知らないことを議論して居るのだから、兩々相對峙して居ても、水掛論に終らざるを得ない。けれども、執拗傲岸なる龍雄は、水掛論に終はることを欲せず、「近所の某翁に質して是非を決し、負けた者は罰として大椀十杯の水を飲むことにしよう。」と提議した。往いて翁に質せば、「それは歴々だよ。」といふので、龍雄の負となつた。さあ水を飲まなければならぬ。井戸端に往いて、大椀を傾けること一杯二杯三杯、遂に七八杯に及んだ。友人も氣の毒に思うて、「もう許してやらう。」と言つた

けれども、龍雄の方が承知せず「男兒たる者が人と約束したことに背くことは出來ない。」と、やがて到頭十杯を飲み盡したとか。

執拗と傲岸とは彼の天性であつた。けれども、この天性を善養すれば、堅忍不拔の意志となり、不屈不撓の精力ともなる。彼が父母は、彼が起居動作の常人に異なるのを見て、大に心を痛め、之を鞠育するのに頗る骨を折り、八歳の時師を選んで就學せしめた。頴敏なる彼はたちまちにして、嶄然たる頭角をあらはし、孟嘗君の綽名を呼ばれるに至つた。孟嘗君とは他日天下の餓鬼大將となつて、食客三千人を養はうとするの謂か。十五歳にして藩校に通學することとなつたが、幾ばくもなく閉居講學の利を悟り、凡庸なる同年輩と交を絶ちて、閑靜なる書室に潛み、その勤學讀書すること絶倫にして、夜を以て晝に繼ぎ、睡魔の襲ひ來る時は、或は辛味を含み、或は冷水に浴し、或は棍棒を以て自ら頭を擊つに至つたといふことである。かくの如きこと數年の間にして、藩校所藏の書籍數萬卷ことごとく目を通したから、その造詣頗る深く、識見甚だ卓出するに至つたけれども、亡師上泉清次郎の義子直藏より外には、これを知る者がなかつた。龍雄が小島氏の養子となつてからは、晝は養父と共に田圃を耕さなければならなかつた。けれども、夜になれば、いそぎ書齋

に入つて、精力を讀書に熱注し、常に鷄鳴を聞いて止んだといふことであるが、彼の机上常に置かれてあつたのは、尊圓親王の墨蹟と『白氏文集』とであつたといふに及んで、彼の雅人としての淵源を知ることが出來る。

彼は、鄕里において、もはや讀むべき書なく、問ふべき師なきを感じて、江戸に遊び、良師を求め、天下の名士に交らうと志して居る時も時、幸なるかな藩侯から、江戸警衛の命に接した。

そこで、慶應元年正月江戸に出て、同年七月役を畢へたから、直に安井息軒の三計塾に入り、從學すること一年餘にして、鄕里米澤に歸つた。龍雄が初めて息軒翁に面謁した時には、頗る傲慢な態度であつたが、漸く翁の學殖深遠なのを知つて、大に推服敬事した。その學ぶ所は、訓詁解釋の末に重きを措かず、經世濟民の事から、修身齊家、格物究理の事に至るまで、讀書攻學の際、疑はしい所があれば、隨つて書き留め、隨つて質問して、その答辯を求めた。翁も務めて答辯せられ答辯は實に該博明晰であつた。

玆に息軒翁と龍雄との關係を明にすべき一好話を挿まう。龍雄が翁に從學してゐる時、ある日のこと、翁が龍雄を呼んで曰はれるには、「此の頃新に舶來した毛布は、背に負へば雨雪を防ぎ、

疊んで座に敷けば、蒲團に代用することが出來て、眞に便利な物だ相な。お前、横濱に往つて、その毛布を買つて來て吳れ。」とて、金子若干を渡された。龍雄は翁の贅澤な註文を快く思はないけれども、師命默しがたく、唯々諾々として急ぎ横濱に赴いた。若しも彼が其の毛布を註文のままに買つて來るならば、尋常一樣のことで、何等の奇とすべき所もない。けれどもその意想外なる買物をして來たのには、誰しも一驚せざるを得ない。彼は數日の後横濱から歸つて來た。そこで、直に翁に謁して、「僕が横濱に往きまして、いはゆる毛布といふものを熟視しましたのに、先生が今まで机邊に用ゐて居られる毛氈と殆ど同じ樣な品物で、若干金の眞價ある物ではありませぬ。先生が、平生勤儉を以て僕たちを御教訓なし下されるからには、たとひ此の贅物を買つて參りましても、先生の御氣にも召しますまいし、御氣には召しましても、勤儉の御趣意に反しませう。それで、毛布を買ふことを止めて、そのかはりに漢譯の『萬國公法』を買つて參りました。先生が若しお暇な時に此の書を御一讀下されば、國家のためには多大の幸福でございませう。」とて、『萬國公法』の條理を說くことが、至つて分明であつた。毛布のかはりに『萬國公法』とは、實に奇拔でないか。この奇拔の買物には、息軒翁も一驚せられた。けれども、翁も然る者、その違約を責めず、却つて其の奇

才を賞揚して、ます〳〵信任せられたといふことである。この師弟の間に交換せられた智見の如何なるものであつたかは、此の一事によつても、幾分か推測することが出來よう。

雄才偉略ある龍雄は、息軒翁に別を惜み惜まれつつ、刀根の流も那須野が原も障なく、米澤に歸つて見た。けれども、山間の一小盆地にばかり生活する藩内士人が呼吸してゐる空氣は、頗る沈滯したもので、彼等の多くは開港の何物たるを知らず、攘夷の何物たるをも知らないのである。討幕の情勢に通ぜず、公武合體の政略にも通ぜぬのである。龍雄の眼から米澤人を見る時は、ほとんど蟲けら同樣であつたらう。

龍雄の政見は勤王佐幕にあつた。をりしも國步艱難にして、人心恟々たる有樣を見るにつけ聞くにつけて、憂慮に堪へず、しば〳〵書を家老に呈して、時務を痛論した。慶應三年には藩命によつて京都に上り、廣く四方の名士と交り、薩長土諸藩の内情を探索して、鄕里に報ずることを怠らなかつた。

大木縱將レ倒、　一繩猶可レ支、　包胥酬レ楚日、
雲井龍雄

子貢使レ齊時、　天地如レ無レ愧、　死生何有レ疑、
此心深與レ淺、　知者竟爲レ誰。

の如き、

蘭氏元全レ趙、　荆軻曾許レ燕、　輪レ誠期二貫日一、
決死誓二回天一、　皇道與花落、　人心趁レ水遷。

の如き、

興論休レ關有二異同一、
不レ知他日汗青上、　百年事業酒詩中、
孰是爲レ奸孰是忠。

の如きは、此の頃の作であらう。龍雄は身體矮小にして、狀貌が婦人の如くであつたから、人は最初之を輕侮した。けれども、その事を議するに至つては、辯論風發して、必ず等輩を屈服せしめたので、人漸く其の豪傑の士たるを知つて、名聲は四方に喧しくなつた。

時に天下の形勢は急轉直下して、將軍の政權返上となり、王政は古に復して、明治の新政府は樹立せられた。けれども、久しく封建の餘勢に慣れたる上下國民は、この一大政變に出會つて、出

處進退に迷ふを免れなかつた。ただ薩長土肥の如き雄藩に多少機を見るの明があつたのみである。特に薩藩は最も雄飛した。そこで、封建の夢いまだ覺めざる德川幕下の兵士は、官軍と鳥羽伏見に戰つて、いたく擊退せられた。官軍は大擧して、江戸に進擊した。龍雄は封建制度が郡縣制度に優るを思ひ、德川氏が朝敵視せられてゐる寃を思ひ、薩士らの機變を憤る者である。彼は奮然として官軍に反抗せむとし、幕士人見勝太郎と相議し、江戸の官軍を夾擊すべき計畫を立てて、東北にかへり、大に奔走策動したけれども、幾ばくもなくして、江戸城は官軍の手へ明け渡された。佐幕派の東北二十一藩は敗れた。會津の鶴が城も陷つた。白虎隊も悲壯な最後を遂げた。米澤藩も降旗を立てた。龍雄は憤慨に堪へず苦心焦慮をかさねたけれども、今は計を施すべき道がない。遂に亦降參するの止むなきに至つた。官軍側の得意は想ひやるべきである。これに反して、東北は此くの如くにして人物登庸の門戸に遠ざかつたのである。

壯心勃々たる龍雄は、凍雲鎖す小天地の間に久しく蟄居するに忍びない。

欲レ成二此志一豈思レ躬、　埋レ骨青山碧海中、

醉撫二腰刀一還冷笑、　決然躍レ馬向二關東一。

といひ、

鼎食何憂五鼎烹、　壯圖將下向二八州一成上、
探來他日雄飛處、　立二馬東寧一睨二赤城一。

といふが如き、その胸中の畫策は、ほぼ推測すべきではないか。明治二年九月東京に上り、集議院に入つて、しば〳〵天下の大計を建てたけれども、時論に合はぬのみか、世人はみな龍雄を異端邪說の徒となして排斥した。龍雄は憤懣措く能はず、

天門之窄窄レ於甕、　不レ容射釣一管仲、
蹭蹬無レ恙舊鱗驥、　生二還江湖一眞一夢、
自笑豪氣猶未レ摧、　每レ經二一艱一一倍來、
睥睨蜻蜓州首尾、　將下向二何處一試上我才上、
溝壑平生決二此志一、　道窮命乖何足レ怪、
唯須二痛飲醉自覺一、　埋骨之山到處羣。

といふ詩を集議院の障子に題して、飄然として出で去り、其の後は京橋西紺屋町の船宿稲屋に下宿して、或は生花を學び、或は詩歌を吟詠しつつ、風流に耽つて居るが如くであつた。しかしながら、これ彼が風流末技に韜晦して居るのである。如何して、彼が風流末技に身を終へる樣な者であらうか。

蜻蜓州の首尾を睥睨しつつある彼は、今や天下の權勢が薩長の手に在り、爾餘の諸藩は齊しく其の前に叩頭して居る樣な態を見て、憂憤して曰ふには、

天下は天下の天下であつて、萬世一系の皇室が之を統御し給ふこと、實に二千五百年にも及んで居る。此の長年月の間には治亂盛衰はあつたけれども、皇室の德澤は雨露の如く一視同仁で國民が王臣たるにおいて彼我の區別はない。しかるに、かの薩長は何者ぞ。戊辰戰勝の功を恃んで、みだりに權を弄び、慾を肆にし、正義の徒を疎んじて、諂諛の輩を近づけ、前には攘夷を主唱しながら、今は媚を外人に呈して憚らぬなど、德なく、義なく、恥を知らず、操を知らぬのは、何たる狀であらう。今にして彼等の暴慢を抑へなくては、世に永く害毒を流して國家の元氣を沮喪せしめることは、鏡にかけて見るが如くであらう。

とて、尾張の僧大舜、松山藩士江秋水、舊幕士三枝釆之助らと相謀り、芝二本榎の上行寺と圓眞寺とを根據として、私に同志の徒を糾合し、陽には亂民を鎭撫するを名として、歸順部曲點檢所といふ標札をかかげたところが、四方脫籍不平の徒が相集まつて、たちまち數百人に及んだ。そこで龍雄は種々の規約を設けて、日夜士氣の訓育につとめて、機の熟するのを待つて居たのに、同志は次第に殖えて、既に數千人に至つた。今は最早躊躇して居られぬと、或日部將を稲屋の樓上に會し地圖を披いて部署を定め、野州日光山、庚申山、奥羽、東海道、甲州府中の各方面より蜂起して、東京を衝き、龍雄自身は二本榎の牙營にありて、臨機に進擊し、直に大城に迫りて、在朝の高官を殲滅しようと、作戰計畫既に定まつて、各方面に出動しはじめた。あはや、數日を待たずして、東京は兵火の街となり、一大禍亂を現出しようとしたが、朝廷では豫ねて龍雄の行動を注視して居たことをとて、たちまち其の異圖あるを察知し、龍雄を米澤藩の邸内に幽し、やがて米澤に護送せしめ更に東京に檻致せしめて、明治三年八月二十八日小塚原に於いて梟首に處したのである。時に年僅に二十七。

嗚呼、傑人雲井龍雄の壯圖は、かくの如くにして破れた。そもそも、龍雄が胸中の經綸は果して如何なるものであつたらうか。封建制度の復興か、德川幕府の再建か、龍雄が世界的知識を有して居たのは、時人の遠く及ぶ所でなかつた。彼が夙に大義名分を辨へて居たのは、その言説によつて明である。如何して、時勢おくれの德川再興の如き愚を演ずる者であらう。その舊部曲を舟橋に會して置酒し、醉後に賦したる詩を見よ。

少小讀破萬卷書、　欲下討二聖源一遡中洙泗上、
道與レ世背無レ所レ用、　放宕却是一俠徒、
破レ産傾レ身多結レ客、　奮爲二六王一進二奇策一、
山東豪傑半屬レ望、　共謂秦兵擊可レ郤、
從散約解壯圖違、　天高地厚亦跼蹐、
一朝自悔心恍然、　深羞二平生氣宇窄一、
君不レ見有窮之女字嫦娥、　一飛奔レ月月爲レ家、
我亦將下高探二其窟一、　手擁二天柱一折中其花上、

又不レ見縱山仙子其名晉、　縹渺駕レ鶴截二雲陣一、
我亦將下遠窮二八紘一、　横絶二弱水一進中其軔上、
聞說八小洲外別有二五大洲一、　長風好放破浪舟、
烏拉之山太平海、　去矣一二周全地球一、
一世俊髦盡把レ臂、　萬國奇勝盡屬レ眸、
然後稅二駕故山一瀟洒伴二松菊一、
一世能事庶幾將二始休一。

また同志に誓ひたる詞を見よ、

我將に朝廷のために目前の小實効を奏し、以て在廷搢紳をして其の猜疑の心を氷解せしめ、然る後勇退遠遊、清に航し、歐に轉じ、文明諸邦多少の英傑に交を遍くし、以て大に我が規模を弘め、大に我が才略を益し、以て君等の望む所に愜ひ得べきの大器となり、然る後回帆、將に初めて共に大に經營する所あらむとす。君等若し實に我を愛せば、目前の小利害に區々として、我が肘を掣し、我が臂を紾し、以て遂に我か大謀を誤ること勿れ。右天地に誓つて自勵

する所の赤心を布く者なり。

といひ、

會稽の恥を雪ぎて以て臣子の大節ここに盡きたりと爲す者、古に在つては則ち喚んで忠臣と爲すを得べからんも、然も今の世に在つては則ち喚んで亂民となすを免れず…。今の時に方りて、獨り一君の宿怨を報い、一藩の舊恥を雪がんと欲し、內訌私鬪、背て神州の安危を顧みざる者は、亂民にあらずして何ぞや…。

といふ語の如きは、その抱負の雄大にして、胸中の豁如たる、眞に人豪の氣が漲つてゐるではないか、六十餘年を經たる昭和の大御代に至つても、なほ政權爭奪のために、或は功利的な政黨政治の軋轢のために、內訌私鬪の絕間なきが如きは、一介の書生たる龍雄に對しても、大に汗顏せねばならぬことである。

龍雄は學問が該博であつた。識見が卓越であつた。胸中には萬斛の雄略壯圖を藏して居た。文藝の如きは、その餘技に過ぎなかつた。しかも、その數多い漢詩の長篇短篇は、すべて剛健崇高で、今の小我に戀々たる輩をして奮起せしめるに足るものがある。歌人としての龍雄は、漢詩人として

の彼には遙に及ばない。けれども、その俗謠に妙を得たる一事も、また傳へて彼が一面を知るの具たらしめねばならぬ。

播磨がた　かへる船路に　啼く時鳥
君の寢覺の　たびごろも
裏けて何處　のぞむらむ
花洛の里か　ふるさとか。

これ彼が人の西國にかへるを送るとて詠んだもので、格調が頗る飄逸である。

雪と梅　雪が薫るか　薫るは梅か
迷ひますのは　君ゆゑに
暗むこころは　眞のやみ
月のあかりで　照したい。

や、

好と好　いとしかはいの　心と心

浮くも沈むも　しら波の
渦巻く瀬戸に　をし鳥の
つがひは暫時　離るとも
結ぶえにしは　切れやせぬ。

の如きは、情緒纏綿として盡きる所を知らず、これを讀誦する者をして神韻縹渺の中に迷ひ入らしめる藻思があるではないか。彼は之に止まらず、都々逸をも作つた。

暗き夜みちに櫻をしらげ
赤きこころを墨で書く
人の爲なら土藏も庫も
君のためなら身も骨も
命惜むな死なれざ殺す

大和たましひ持ちながら

の如きは、俗にして俗ならず、よく志士の面目を發揮して居るものである、彼は是等の歌を以て各

地の同盟に心事を通ずる具としたのである。彼は普通の短歌は詠まなかつたであらうか。自分は彼が玉榮禪師に別れた時の、

問はれては何と答へむ行先を
雲と水とに寄する此の身は

といふ一首だけしか記憶せぬのである。要するに、彼が詠んだ歌の數は至つて少かつたに違ないけれども、この數首にも、なほ能く彼が尋常武骨一偏の人でなかつたことを窺ふことが出來る。彼が才氣英發のところは長州の久坂玄瑞に相似たるところがある。これを出羽人に求める時は、清川八郎か。八郎が山岡鐵太郎らと謀りたる事蹟と、鎭西に奔走して、

遠到二西陲一募二義師一　尊前每レ見淚痕垂、
徒手俱圖二報國策一　赤心偏誓二致身期一、
聖王艱苦一朝迫　臣子偸安百事移、
閑二吟櫻下一俟二花時一。

と吟じ、また或時、

吹きおろせ富士の高根の大御風

四方の海路のちりを攘はむ

と詠じた意氣とは、また之を龍雄の事蹟と意氣とに類ふべきものがあらう。ただ異なる所の著しいのは、龍雄の人物が玄瑞や八郎よりも、はるかに偉大な點である。彼が若し長命を得たならば、いはゆる長閥薩閥の横暴を繼續する時期は餘程短縮せられたであらう。殊に東北地方の人物は明治以來多く輩出して居るであらう。短命なる彼の不幸は、決して彼のみの不幸ではなかつた。

(二) 林　櫻園

彩華に滿ちた明治時代も、その初年においては、新政反對の風が時々吹き荒んで、あはれ花の蕾を散らさうとした。すなはち最初には明治三年に雲井龍雄が反亂を企てるあり、明治七年には江藤新平や島義男らの反亂があり、ついで明治九年には熊本神風連の反亂あり、萩に前原一誠の亂あり、秋月に宮崎車之助の亂あり、明治十年には西南に西郷隆盛らの亂があつて、暴風强雨はしきりに我が新日本の天地を見舞つたのである。明治維新における元勳の一人なる大久保利通が「王政維新の十年間は創業撥亂の時であつた。」と回顧したといふのは、さもあるべきである。けれども、是等反亂の徒にも忠君愛國の熱誠は烈しかつた。さる精神の者から觀る時は、歐化主義に傾いたる新政には、飽き足らぬ點や、心配な點が多かつたので、さてこそ花に對する風の如く反旗を飜すに至つたのである。

中にも熊本における神風連の如きは、保守的信仰が最も牢く、歐化を惡むことが蛇蝎におけるが如くであつた。そもそも、熊本の政界には當時學校黨、實學黨、勤王黨、民權黨、敬神黨の五黨派

があつて、互に砥礪して居たが、神風連といふのは其の敬神黨のことで、勤王黨よりも一層尊王攘夷の思想が激烈であつた。おなじ勤王の思想を抱いて居る者の中にも、進歩派と保守派とあつて、進歩派の人々は、外國に對する道は、我が國權を伸ばし、我が國威を輝かすことが出來るのならば、國を開くのも可い。必しも攘夷説などに拘泥しては居られない。」となして居り、出でて明治の新政府に仕へたのに、一方保守派の人々は、極端なる尊攘主義を固執して、何につけ、かにつけて、新政府の施設に不平をいだき、決然として野に退いて居たのである。この派に屬する領袖は、太田黑伴雄、加屋霽堅、上野堅吾、齋藤求三郎、愛敬左司馬などの面々で、林櫻園は其の樞軸であつた。かくて、是等の人々は、太田黑伴雄の

よは寒くなりまさるなり唐衣
うつに心のいそがるるかな

皇神の御稜威をかくと夷らに
思ひ知らせむ時ちかみかも

と歌つた如く、手ぐすねひいて、攘夷排外の好機會を待つて居たのである。

敬神黨の精神は、頗る超脱的のものであつた。この精神を鄕黨の間に涵養せしめたものは、林櫻園である。林櫻園は今まで他の地方へはあまり知られて居らない。熊本の東北部なる千葉城に住んで、千葉城老人と自稱し、櫻園と號して、みづから高く標榜して居た彼は、本姓は越智、名は有通通稱は藤次、その容貌の眼鋭く鼻高く下唇垂れて頤を蔽ふが如くにして魁偉であつたから、人みな畏敬して櫻園先生と言つて居たのである。櫻園は傲放不羈の人であつたが、稍長じてからは自ら悔いて、讀書にのみ心を傾け、和漢古今に亙つて讀破せざるはなく、殊に老子と文中子とを愛讀したといふことである。時に一藩の學風は靡然として朱子學を尙び、文字章句の末に拘泥して、經國の思想を探るには暇がなかつた。櫻園は慨然として此の弊を斥け、苦學勵精して、一家を成すに至つた。學成り識進むに及んでは、その出處進退が前の二子に類するものがあつたといふことである。講讀の際、しばしば門生に對して、老子の「良賈は深く藏して、虛なるが如く、君子は盛德にして容貌愚なるが如し」といふ語を提唱し、かつ曰はく「この語の如きは器局偏小なるものの知る所でない。」と、これによつても、夫子のみづから標榜して居た所が察せられるではないか。

櫻園は博覽强記の人であつた。その學問には萬有を究めるのが目的であつて、特に兵書を繙き、晩年に至つては好みて西洋の兵書をも讀みあきらめた。けれども、かれの本領とする所は、皇國の學であつた。それも、考證穿鑿を主とするのではなく、國典の精髄を研究して、古神道を實行しようとするのであつた。

これより先、熊本には高本紫溟、富田大鳳とて、儒學を修めながらも、大義名分を明にして、皇道の衰微を慨き、尊王の志をいだいてゐた人があつた。紫溟曾て歌うて曰はく、

もろこしも東風吹く風に匂ふらし
　やまと島根の花のさかりは

この一首また其の志の存する所を觀ることが出來る。大鳳は更に慷慨の人であつた。大鳳ある時、衣冠束帶の雛人形を見て、その前に拜伏し、涙を流し啜り泣いて曰はく、「天皇陛下御心を勞し給ふな。天皇陛下御心を勞し給ふな。私が此の世に生存する間に、天下を陛下に歸し奉りませう。陛下大御心を勞し給はぬやうに……」と獨語して止まず、人をして其の狂するかを疑はしめるに至つたといふ。あゝ、尊王の大熱誠も此に至つて極まると言ふべきである。このほか、三足とて、中

島廣足、羽田眞足、和田嚴足などの國學者もあつて、熊本における此の頃の國學界は頗る賑はしかつた。けれども、熊本における尊王の首唱は、高本と富田との功で、嘉永癸丑このかた一藩に卒先して、尊王攘夷を唱へた勤王黨の人々は、みな此の二氏の風を望んで興起したものである。

この間に在つて、櫻園は別に一家獨特の見識を立て、敢て尋常國學者の舊套を脫し、皇國の古道を實行しようとしたのは、その志操の如何に崇高であつたかを窺はれるではないか。櫻園の古道に關する意見は『昇天祕說』『宇氣比考』『答或問書』の三書によつて知ることが出來るであらうけれども、自分は不幸にして此の三著を手にするの機會に接せない。ただ小早川秀雄氏著の『熊本敬神黨』に掲げられたる所によつて、その一斑を窺つたのみである。曰はく、

人間の極致は昇天を最上とす。蓋し世界に神界人界の二界あり。神界には生死なし。生死は特に人界にのみあり。古傳に據るに、生死は伊弉諾伊弉冊二尊の故事に由つて起る。人生の最も惡むべきものは、死より甚しきは無し。凡庸人は神道を知らず、身心ともに濁穢を犯す。是を以て、可尤惡の死を免れず、若し人、身心共に濁穢を犯さず、清淨潔白にして、常に神明の道に叫ふ時は、おのづから昇天の果を得て、神位に列し、不生不滅の域に至るべし。

これ彼の宇宙觀にして、また人生觀である。また曰はく、

本邦上古は、異教なく、專ら御國の神道を以て、天下を治め給へり。神道は神に事ふる儀式に外ならず、上古この儀式の盛に行はれたる間は、國豐に民安かりしに、後世この道陵夷して より、種々不祥の事ども起り、遂に文相武臣相踵いで權を竊むに至れり。故に皇道の隆昌を希はば、先づ此の道を起さざるべからず。殊に現世を知召す天皇は、卽ち顯世の神に在せば、之に仕へ奉ると、幽世の神明に仕へ奉ると、幽顯の異こそあれ、その理に於いて異る處はなきなり。この意を推し廣めば、世はおのづから治るべき道理なり。神武天皇より以來、代々この道を奉戴し、天皇は現世の神に在して、その下に發し給ふ所の御政令は、みな神命を受けて發し給ふことを、人民みな承知し居らば、敢て其の命を拒否する者もなく、政令常に行はれて天下は艾安なるなり。然るに、この神令を承くることに三種あり。

一には、審神者を以て之を承くる事。

二には、卜傳を以て之を承くる事。

三には、誓約祈禱して夢の敎を請ふ事。

此の三事は神武以來代々の天皇の神道に因つて國を治め給ひし大要なり。故に今代に生れて、太古の神道を奉ずる者は、亦宜しく此の道に倣つて、顯世の事を處分すべし。

これ彼の神道觀で、また政治觀である。これを約言すれば、人たる者は心身を清淨潔白にして、神命によりて現世の事を行ふべし。」といふのである。櫻園は、この說によつて、門下生を敎育したものである。ただに人を敎育するのみならず、櫻園は日常獨坐沈念して神明と交涉し、その行動言說の頗る幽玄不可思議なる所が多かつたので、門下生などの櫻園を見ることは、恰も神明に對するが如く、櫻園の主義信條は、恰も神明の命令たるが如き權威を以て、子弟の行動を左右したのである。

櫻園は曾て江戸に來り、水戸に往いて、藤田東湖に面會し、互の意見を交換したこともあつたけれども、風言雨語相合はずして、空しく袂を分かつた。明治二年、三條實美公は朝命を以て櫻園を召されたことがある。櫻園は高足なる太田黑伴雄など門生數名を伴うて上京し、三條公に謁し、諮問に應じたこともあつたけれども、水問氷答の淡々泊々なる、測りがたきことのみ多く、幾ばくならずして鄕里に還つた。或日客があり、櫻園に對して、我が國昇平二百餘年、上下無事に馴れて、

武備も廢れて居ることが久しい。一朝熟練なる將士と精整なる機械とを有する山の如き戰艦が直に江戸灣深く突入したならば、大砲一發、江戸城を粉な微塵にし、二百萬の生靈、三百年の大都は忽ち烏有に歸するであらう。高見如何。」と問うた。仙人の如き櫻園は事もなげに「足下輩が平日の言に天下太平久しくして、上下安を偸み、驕奢の弊の增長するところ國を亡ぼさずば止むまい。宜しく此の弊を掃蕩して、士氣を鼓舞振作するがよい、といふではないか。もし外國と戰端を生じ、江戸城が灰燼ともならば、その結果として、三百年來驕奢淫靡の弊は一掃せられ、我々の如き老朽の無用漢は大砲の響に震死して、祿食の費は是が爲に減じ、玉の弓や黃金の箭の如き幕吏や乳臭い諸侯は溝壑に投ぜられて、英雄豪傑が奮然と袂を揮つて起ち、その抱負を展べるであらう。これ足下らの志望たる武備充實は期せずして其の効果を奏するのではないか。あまりに豫備に過ぎて、睫毛に火の粉の落ち來る用心までして、火事場に赴くが如きは、活機に處する所以でないよ。けれども、これは今日が緊急の時機で、兩三年を經て、海內の人心が餘に研究に傾き、理窟に陷る時は、天下の事また如何とも爲すべからざらに至るであらう。今日は面白い時勢ぢや。」と答へられたので、客は呆然として去つたといふことである。櫻園の談議は、とかく人の意表に出でる事が多かつた。

けれども、櫻園が事務の才幹は、藤田東湖や佐久間象山や横井小楠らには及ばなかつたであらう。ただ氣節と風格との高邁なる點は、はるかに此の三人をも凌駕して居たに違ない。氣節と風格との高邁は尊敬すべきものであるけれども、活社會の競爭には事務の才幹ある者でなくては打勝つことが出來ない。姑に、後の敬神黨反亂の際、櫻園の薫陶を受けた人々は、蓋世の氣こそあれ、神力の擁護をたのむ刀槍軍は、陣列の秩序立ちたる銃砲軍に敵しがたくして、脆くも敗れるに至つたのである。これ日本武器の神聖をのみ信じて、舶來武器を醜夷の武器にして採るに足らずと侮りたるに因る。敬神黨の西洋器具を嫌ふことは最も甚しく、西洋鞍を置きて馬に騎りたる佐久間象山を刺し殺したのも肥後の士であつた。肥後の人士は、維新の後、西洋の事物の採用せられるもの多く、電線の架設せられたるを見ては、成るだけ線下を潛り拔けることを避け、止むを得ない時は、扇を開き頭上を覆うて通行したといふ程である。自分に熊本出身の知人がある。その人も曾て電線の下を潛りぬけることを避けたと話したことがあつたが、今は電氣鐵道會社に勤めて、平然として居る。時勢の推移と人心の變化との關係を知ることが出來るではないか。

さても、櫻園は鄕里に在つて、每朝早く起きては、神拜式を行ひ、晝は藤崎八幡や山崎天神、そ

のほか各所の神社に參拜し、時に城南二里餘なる新開の伊勢大神宮、城北三里なる鎧田の杵築宮に參拜することを忘らず、專ら國運の隆興と寶祚の無窮とを祈つて居たが、明治三年に至り、野山の木の葉散りて、おく霜寒き十一月、病んで逝去したのである。その辭世は

如何ばかり今日のわかれの惜しからむ
散らぬはな咲く此の世なりせば

かくの如く櫻園の一生は、さほどの屈折もなくして終つたのである。けれども、櫻園逝いてより六年、その主義精神を承け繼いだる神風連が、歐化熱に浮かされたる當局者に反抗したがために、國史上忘れることの出來ない一巨人たることが明になつた。

されば、櫻園は歌人としても平凡なる叙景叙情の歌人たるが如きものではない。かれの歌は林有通大人歌として、『肥後先哲遺稿』に出て居るのが七十餘首、その他の雜著にも散見する。その中について、神威を詠みたるものは、

いにしへの道のたかさにたぐへては
阿蘇のみたけもふもとなりけり

皇神のみいつを見せよ廣幡の
やはたのみやの神のかみかぜ
廣幡のやはたの神をせおひつつ
ゆけばおそるる仇だにもなし

といふ類で、「いにしへの道」の歌は、嘉永四年五月十八日の曉に、一かさ高き山に庵して、阿蘇山を目の下に見て、かの煙の立ちのぼるさまも面白く感じた夢を見た後の詠である。神道を詠みたる歌は、

われもまた道の光をそへなまし
かしこき人のあとにならひて
玉幸かみのならひをならひつつ
ならふぞ神の道にはありける
世の中はただ何事もうちすてて
神をいのるぞまことなりける

神ならふしわざもなどかなら柴の
　ならじとのみは思ひはつべき
いにしへの神のみことをならひつつ
　ならふぞ神の道にはありける
浮橋は神代のままにのこれども
　ゆくべき人のなきぞかなしき

「玉ぢはふ」の歌には「皇神の道をおのれ年ごろ深くたふとみまつる兆にや、けさはしも思ひ得つること有れば、うれしく、天地の神に行末をいのりまつりて」といふ詞書がしてある。かれは實に神の道の正意に從ひて、これを實行しようと心がけて居た者である。ゆゑに忠君愛國の情も盛である。かれが忠君愛國の情を歌ひたるには、

うちはへて千里のほかを想ひやる
　こころのうちを誰にかたらむ
おろかなる心におもふ一ことを
　あはれみたまへあめつちの神
君をおきて身はふるさとに歸れども
　こころのとまるあめつちの空
天地の神のみたまをたまはりて
　わがにぎたまも世を守りなむ
夢の世も仇に過すな大君の
　こころなやます御代の最中ぞ

「うちはへて」の歌には「文久三年春のころ京の事などおもひて」とあり、「君をおきて」の歌には「江戸を立ちて國にかへる時」とある。櫻園が起つにも居るにも、君をおもひ國を憂へて居た至誠は、これらの歌の上にも溢れて居る。けれども、かれの歌には攘夷排外の思想を詠んだものはない。却つて皇運の無窮と國威の發揚とを詠んで居る。天保の頃の詠には

蝦夷がしま松浦の海のするまでも
　なみをさまれる君が御代かも

いづる日の光を四方にしきしまや
　やまとてぶりを代々に傳へむ
遙なる高麗もろこしもまつろはむ
　わが日の本のかみの御代かも
いく代ともかぎり知られぬ亀の尾の
　やまのよはひを君がつむべき
弘化の頃には
　君が代はかぎりはあらじ久方の
　　雲井のそらのはてしなければ
嘉永の頃には
　富士のねをいづる日かげに四方の海
　　八しまのそとも春を知るらむ
安政の頃には

　　度會や内外の宮のましませば
　　天つひつぎの御代はうごかじ
慶應の頃には
　青雲のむかふすきはみ天皇の
　　みいつの風になびかざらめや

など、いづれも元旦の作で、祝賀の意ながら、かれが日本臣民としての信仰は、膨張的日本といふことに在つた。ただ惜しいことには、我が建國の精神を解して、江藤新平らの如く國運の發展を策するまでには、思慮が進んで居らなかつたもののやうである。今日においては、明治の初年よりは倍數の廣袤を有する帝國となつたのみならず、我が日本民族の足跡は殆ど世界の隅々に行き渡つて居るほどであるが、かくて神道實行國たる日本が益々發展して白人種を統治するまでに至らしめたい。しかし、それには國民が今よりも數倍數十倍の努力健闘を爲す必要がある。

櫻園の思想として、最も異彩あるものは、昇天の思想である。かれが昇天の説は、その著なる『昇天祕説』に述べてあるのであるが、その心を詠んだ歌がある。

白鳥の天がけりけむあととめて
身のなきからを世になつ遺しそ

「白鳥の天かけりけむ」とは、日本武尊の白鳥と化して天に上り給うた故事を言つたものか。「いのちさへ身さへ假なる假の世に」といふ詠もありて、彼は昇天の果を得て神位に列することのあるものと信じて居たのである。他の諸詠の如きは、類例を求めたら、同じ思想のものも多からうけれども、この一首は櫻園にして初めて詠み得たものである。彼にも縣居翁や本居翁を敬ひ慕うた歌があり、なき母を追懐した歌もあり、叙景の歌もあるが、この白鳥の歌一首のみを以て、彼は永久に名を遺すに足るであらう。嗚呼、崇高なる精神の結晶であつた櫻園は、今や果して天に在るか、はた地に在るか。

(三) 大國隆正

現代我が國の思潮は頗る混沌たるものである。混沌たるが中にも、我が日本帝國を以て世界の一等國とし、世界の中心國として經論して行かうとする國民の自覺や抱負がほの見えて居る。自分らも其の覺悟で世の中を指導してゆかねばならぬと信じて、曾て

地といふ此の地はみな天皇の
統べ知らすべきものと知らずや
たかひかる天つ日嗣は人の世に
ひとつあるこそ世はしづかなれ

など詠んだことがある。かゝる思想を陳述するに當つて、回顧せずに居られないのは、大國隆正翁である。

大國隆正は野之口隆正と同じ人である。井上梧陰の『梧陰存稿』に岩倉具視公の逸事を叙したる文がある。その中に、碩學野之口隆正の説として、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳に其の人

なかりしに困れり。」といひ、北畠親房准后の遠謀高見に缺けて居たことを非議した條がある。自分は初めて『梧陰存稿』を讀んだ時、翁の見議を想望したが、そののち福羽美靜翁を代々木の邸に訪問して、種々の懷舊談を承つてから、隆正翁を欽慕する情が非常に切になつたのである。これ隆正翁が大阪心齋橋筋の書物店で眞淵翁自筆の『祝詞考』稿本三冊を買ひ得て、「そのみ魂や我を導き給ひけむと、いと嬉し。」とて、

筆の蹟も我が身を岸と寄りぬらむ

加茂のかはみづながれながれて

と詠まれた情と同じであらう。しかも、事繁きに紛れて翁の事蹟を研究することを怠つて居たが、友人佐々木梅治氏が翁の書かれた長歌の一幅を手に入れて示されたのを見た時、

ふる雪は葉するゑなびかし、てる月は葉かげをすけり。そのゆきのふりこぬ夏はふくかぜの枝にたえせず。そのつきのてらぬあしたはしらつゆぞ風にこぼるゝ。かくばかりなつかしきたけなつかしむこゝろのあまり、笛にせん、杖にやきらん。きらでたゞ友とこそ見め、千年をかねて。

といふのを讀んで、その詞も意も清麗優雅な上に、筆蹟の秀拔なのを知つて、殊に翁を敬慕する情を激發した。佐々木氏は英學を以て世に立つて居た人であるが、また俳句を研究し、書畫骨董にも趣味深く、をり〳〵珍什を堀出して來た。翁の歌を求められた時、翁の事蹟や人物を自分に尋ねられたので、自分は大體を答へておいて、經濟雜誌社の人名辭書を探つて見たのに、これには自分の知つて居るだけも書いてない。そこで、翁を研究したい思念は勃々として抑へがたくなつたのである。

翁は實に維新の風雲を捲き起す上に大功のあつた偉人である。時代思潮の鼓吹者として東奔西走せられたばかりでなく、その著述には、

古傳通解	本教神理論
駿馭戎問答	神道受用考證
神字原	神字箋
文武虛實論	文武虛實論提要
君臣名義考	球上一覽
本學舉要	眞詰新釋
金抗辨	尊皇攘夷策論
當世要語	

籠神考	新眞公法論	尊皇攘夷異說	
斥儒佛	死後安心錄	音圖神解	
活話活法理抄	同提要	通路延約辨	
歌日記	憐駁者	兼好傳考證	
梓ものがたり	鼻くらべ草	八代八百首解	
花なき花	文なき文	聖行神道大意	
魂魄辨	三道三欲昇降圖說	人天合理對格	
本教要論	神道要論	神道性論	
學統辨論	源平交戰圖賛	神理說底本	
學運論	歌學入問	神理小言	
矮屋一家言	あかそこの辨	精撰用語圖	
詞の正みち	神典究理說	神代交異傳講義	
神代幽契談	結辭對格	自行活用格	

合語格	助辭例證	正誤歌詞	
玉のや集	候錄	さきはふ國ふみ	
冠辭考附論	語格直言	天津祝詞太祝詞考	
やまとごころ	三五後案	道の長歌	
天地歌	神道みちしるべ	直毘靈補注	

など數十部あるので、なか〳〵翁の全體を研究することは一大事業である。到底短い月日で能くすべきではない。

隆正翁は、石州津和野の藩士今井秀馨の子である。翁は寛政四年十一月二十九日に江戸の櫻田なる津和野藩邸で生れた。父秀馨は津和野藩に仕へて、深川富岡八幡前なる龜井家別邸内に鎭座してある人麿祠の社司となり、かねて夫人や女公子の習字の師を勤めて居たが、後には廣く門生を教授したのである。隆正翁が歌道に熱心し、筆蹟にすぐれて居たのは、淵源する所があるのを知らねばならぬ。

翁は甫めて九歲の時伊呂波歌を誦んで、深く感奮する所あり。十一歲の時五十音圖を習ひ得て、

その音韻の神妙不測なるを知覺し、その活用變化の妙理に至つては、宇宙萬有の神理を包含する本源たるべきを感悟したといふことである。五十音圖の音韻配列が精妙なることは、誰しも認める所であるが、その活用變化の妙理が宇宙萬有の神理を含む本源たるべき意義は、如何に感悟せられたのか、自分は未だ窺ひ知らぬけれども、翁が幼年の時既に音韻學上に深い趣味を有し、それについて種々の考察を下され、それに對して一種の靈感を發せられたのであらう。十五歲になつては、平田篤胤に就いて古道學を修め、古賀精里に隨つて儒教を學んだ。けれども、十八歲に至り、孝經の「不愛其親而愛他人者謂之悖德。不敬其親而敬他人者謂之悖禮。」といふを知るに及んで、宜しく先づ皇學を修めて、而る後に漢土の書を學ぶべし。」との志を發したのである。これ平田翁の

人はよし唐につくとも我が杖は
やまと島根に立てむとぞおもふ

と詠まれたのと同じ精神であらう。

その頃翁は書畫を學習するのみならず、漢詩をさへ賦し、普く江戸の文人墨客と交り、專ら風流韻事に心を傾けて居られたが、やがて村田春門について音韻學を受け、二十七歲の時には長崎に遊

學して、西洋の理學を吉尾權之助に質し、また梵書をさへ涉獵したのである。

立てそむる志だにたゆまずば
龍のあぎとの珠も取るべし

といふ立志の歌は、この頃の作である。その志氣の豪邁なることは、この一首にも能くあらはれて居る。かく憤起しては、いたづらに文人墨客と交りて悠々閑々としては居られない。これより後、文墨の人との交際を絕つて、專ら五十音圖の絕妙なるものたるを闡發する著述に努め、また柿本人麿が能く其の時弊を察し、漢學の害あるを看破し、我が古道を復興すべき志の堅かつたことを發見して、その人麿に對する崇敬の情は頓に深厚を加へたのである。

高角の高きしらべは昔今
たれかかけても立ちならぶべき
うぐひすも蛙も歌をよむ中に
ひとりことなるしらべたふとし
立ち並ぶ人こそあらね昔今

たかつのやまのたかきしらべに

などいふ歌があるのを見ても、翁が人麿を崇拜せられた程度は知られるのである。

翁三十八歳の時、事によつて亡命したが、四十歳の時、父翁は七十八歳で歿せられたけれども、脱藩の身なるが故に、喪主たることが出來なかつた。四十一歳の時、門生を榎町に會し、二七日ごとに國典を講じ、後三たび移居して講學に從事したが、當時貧困その極に達し、妻子を鞠養することが出來ず、夫人は二女を携へて其の兄井上忠民に身を寄せるに至つた。けれども、翁は獨居して近隣からの惠に飢を醫しつつ、平氣で書を讀み文を著して居られた。その事に頓着せぬのは、此の類である。その後火災に遭つて、翁もまた忠民に寄寓したが、間もなく忠民の家も祝融の禍にかかつたので、翁は江戸に止り住むことが出來ず、妻子を忠民に託し、ひとり大阪に赴かねばならなくなつた。

思ふ子をおきて出でにし我がさとは
ひとつゐごとに遠ざかりゆく

如何にも物あはれで、その遲々として顧みがちに江戸を離れゆく悄然たる翁の面影は、目前に見

える心地がするではないか。この行、翁は歌日記を書いて、長汀曲浦をたどる情を叙したのである。雨の日の感は如何であつたらうか。月の夜の情は如何であつたらうか。

けれども、頓挫のために志氣の沮喪するが如きは、凡人のことである。翁は京攝の間に投じて、さかんに國學を唱說し、門人日に增し、學業大に振ひて、名聲は急に高くなつた。時に敎の說といふものを立てて云ふには「佛敎は幽冥を旨として、顯露にことそいで居る。儒敎は顯露に局りて幽冥をかたらない。この日本の敎は、幽顯分界を旨として、天地の始をば幽冥を以て說き、今日の事業は幽冥を離れて朝家に服事して居る。」とて、敎の萬國同じからざるを說き、「この國の故事によりて人を敎へ導くものを、世に和學者國學者などいへどあたらない。よそでは如何にもいへ、みづからは本敎本學といふべきである。」とて、『古事記』の序にある「太素杳冥、因二本敎一而識孕レ土產レ島之時上、元始綿邈、賴二先聖一而察下生レ神立レ人之世上」とあるのを引證して居る。その神代史により て本敎本學を創說したるが如き卓拔の見識は、往々時人を驚倒したであらう。

四十四歳の時、江戸より妻子を大阪に呼び迎へたが、四十五歳の時、播磨國小野藩主なる一柳侯に聘せられて、藩侯および子弟を敎導し、留まること五年に及んだ。天保十二年小野を辭して、居

を京都に移した。

うれしくぞ都の人となりにける
　舌だみたりしことばながらに

黄鳥は今や幽谷を出でて喬木に遷つたのである。此の年岩倉具集卿が翁の門に入つて、業を受けられることとなつた。翁は乃ち歌を詠じて卿に與へられた。

かげうつるあやなき色も池水の
　そこのこころをたのむふぢなみ

これに對して、卿からは鶯蕎梅といふ花に一首の歌を添へて、翁に贈られた。

をしといふ名にはあれども君がため
　たをるはやすき梅にぞありける

翁の敬慕を受けて居られたことは、卿の歌詞によつても明である。この具集卿といふのは、維新の元勳たる具視卿の祖父君である。既に此の搢紳有識の人を門弟の中に數へるに至つては、翁の得意は察するに餘がある。殊に門人中には玉松操といふものがあつて、具視卿の知遇を得て、神武復

古説を卿に推奬したのを見ては、翁の意見と明治維新との間に親密なる關係のあることは確に推測られるのである。

居を京都に卜したる翁は、皇室の衰微しましたる御有様を熟知し奉るにつれて、憤慨の情は益々激しくなつて來たであらう。春うららかにして氣のどかなる日、嵐山や御室に逍遙するとては、

花咲けど行幸のひびき聞えねば
　あらしの山のかひやなからむ

と詠み、牛の繪を見ても、

いにしへの行幸の車世に絶えて
　引かぬをうしと思ひわぶらむ

と悲んだのである。翁の家塾は報本學舍といふのであるが、翁がみづから記されたる學舍記を見るのに、「かへすがへすも顯忠顯孝を常のしわざとつとめはげみて、いとまのひまに幽忠幽孝のすぢにかなへるものまなびをなすべきなり。」とて、天皇至上主義を唱へ、我が天皇は世界萬國の天皇にて

おはしますことを懇に述べて居られる。この所見を以て、子弟を薫陶せられたのであるから、誰か感奮興起しないものがあらう。この頃また眞爾園塾法とて學制を定められたが、本學階級、神理學階級、扶翼階級の三部門、おの〳〵第九等より第四等に至り、この三部門を修了したるものを第三等とし、更に蘊奥を究めたるものを第二等第一等として昇級せしめる制度で、その學課の配當組立など、秩序整然たるものである。その弘化二年に著したる述意文の中に、

はてはこのみち唐土よりさきの國々にも行はれて、そのあたりのものみな天地のまことのおほきみこの國におはしますことを知りて、貢物を持ち運びて、萬國ことごとく此の國に屬き從ひて、あめつちのむた變らざるべし。

といひ、

たとひもろこし天竺にうまれても、此の大日本のためをおもふべき實義あり。そは地球上萬國の總王なる天皇おはします國なればなり。

といへる、翁の信念と學風との一斑を見ることが出來る。同じ頃また『和魂』と題する一書を著して、福山藩主阿部侯に呈したが、藩の儒員より異議が起り、竟には林大學頭より幕府の儒員に示して論評せしめた所が、いづれも異端の甚しき者とし、刑罰は翁の頭上に落ち來らうとした。けれども、前田夏蔭や西野新治や水戸烈公の救護によつて、その災厄を免れた。のみならず、そこで、水戸烈公の第に伺候する機會を得、やがてまた關白鷹司政通公にも謁して、皇室の權威を恢復し奉らねばならぬといふ持説を陳べることが出來た。はじめて鷹司公に謁した時、翁は

賤が身のせばき袖にはいとどしく
つつむにあまる今日の嬉しさ

と詠まれたが、曾て轗軻落魄して、大江戸の八百八街身を置くに處もなかつた翁にして、今や天下有力の貴紳に出入し、その懷抱を披瀝するに至つた翁の胸中は、實に歎喜の情を以て滿たされたであらう。

翁の名聲は大に高くなつた。嘉永四年九月に至つては、津和野藩主亀井侯が翁の學識を嘉し、諭して原籍に復せしめようとせられた。しかし、翁は其の光榮を謝し、かつ曰はれるには、「謹みて其の恩命の忝きを拜謝します。然るに、今や天下の志士たる者は、尊皇愛國の志念を養成し、大に倭魂を鼓舞振作すべき好時期に際會して居ます。それに、もし束縛を受けて進退が自由でない時は

時に臨んで驥足を伸べることの出來ぬ憾がありませう。何卒隆正の如きは、特に制外に置いて下しおかれたい。」と請願せられたのである。鮫龍は遂に池中のものならざる本性を發揮して來た。翁は是から教授するにも、著述するにも、交遊するにも、ひたすら皇威發揚を說き、攘夷を論じ、海防を策し、大に天下の志士を激勵して、我が日本をして明治維新の春に逢はしめたのである。殊に彼の門人師岡正胤らが足利將軍三代の木像を首斬つて、三條磧に梟したのなどは、翁の與へられた感化の如何に强烈であつたかを知るべきである。しかも翁の志は是に止まるのではない。翁は我が日本を以て世界の中心たらしめることを期して居られたことを忘れてはならぬ。

隆正翁は子弟に對して激越なる感情を與へた。殊に神武復古の一大義を授けた。けれども、自身が三軍を叱咤して風雲の機に乘じようといふが如き覇氣があつたのではない。幕府の倒れて、大政が遂に朝廷に歸した時、翁は嬉しさに堪へず、歌を詠じて曰はく、

花咲きぬ牛となりても大君の
　みゆきのくるま牽かむとぞ思ふ

これ如何にも淳朴なる眞情流露の歌である。幕府の專横を極めて居た時には、一天萬乘の君主にましましながら、嵐山の春を探り給ふ御自由なく、高雄山の秋を賞し給ふこともかなはせられず、如何にも式微に渡らせられた皇室の、一朝御稜威かがやく御地位を恢復せさせ給うたのは、御當然の事とは申しながら、心ある者は誰しも翁と感を同じうせずには居られなかつたであらう。殊に神武復古說の首唱者たる翁においては、嬉しさに狂喜せられたであらう。翁は權勢の人ではなく、論議の人である。翁は俗務の人ではなく、情味の人である。論議を以て人を敎諭し、情味を以て自然と人事とを諷詠したのである。されば、翁は一方では敎育家たり、一方では歌人たる資質を具へて居る人であつたのである。

翁は忠君愛國を以て終始一貫した人である。歌人としての翁は、春花に心を動かし、秋葉に情を燃やさぬでもなかつたけれども、また花鳥山水を吟詠するに優麗なる詞藻と高逸なる格調とを以てする技能を有せぬでもなかつたけれども、それよりも翁の特色を發揮したのは、尊皇愛國の歌である、日本主義の歌である、大帝國主義の歌である。

翁の歌を集めたる書を『眞爾園翁歌集』といふ。門人佐伯利麿と加茂嚴夫との共輯に係る。この

歌集に收められた歌は、春二百四十三首、夏百七十八首、秋二百十七首、冬百五十六首、戀十八首雜三百五十四首、旋頭歌一首、長歌十首の總計一千一百七十七首であるけれども、本書に漏れたる歌も多いであらう。現に寡聞なる自分の本文中に取材したものにも、歌集中には見當らぬものがある。拾遺を編輯しようといふ企は、編者の序文中に見えてあるから、既に出來て居るかも知れない。神道百首といふ翁の著もあつたといふことだのに、殘念にも見る機會がなかつた。

牛となりても大君の行幸の輦を牽かうと希ふ翁は、我が日本帝國の臣民と生れ來たのを無上の幸榮として、

大君のたがはぬ國に生れ來て
　をさまれる世に逢ふぞ嬉しき

と歌ひ、武御雷神を詠みては、

大君のみ言かしこみ荒ぶるを
　うちしたがへしみかづちの神

宇麻志眞手命を詠じては、

大君を君と知りつつまつろひし
　そのもののふのはじめかしこし

厩戸皇子を詠じては、

その罪をしらず顏なる厩戸は
　馬子をかくす名にぞありけろ
とき耳と名のみは立ちて天皇の
　仇をばよそにききすごしつつ

楠正成を詠じては、

大君の爲にこもりてちはやぶる
　神代のままに御代をたすけつ

と歌ひたるによつても、その如何なる人物に私淑し、如何なる行動を嫌惡したかを忖ることが出來る。日本は世界最貴の國である。列國は此の最貴最尊の光輝に俯伏すべきである。

鶉なすいはひをろがみ鹿自物

膝をりふせよえみしらが伴
我が日本に接近し來ることは名譽である。
かへる雁えみしに告げよ天皇の
かはらぬ國の花にあひぬと

この名譽は、我が國が萬世一系の皇室を戴いて居るからである。建國以來大義明に、名分正しく、人がみな道德を履踐して居る國であるからである。翁の謂はゆる

神代より君と親とに從ひて
かたみにすくふ秋津しま人

の國であるからである。この理想的なる國體と美風良俗とは永遠に維持せねばならぬ。君が代は千代に榮え、八千代に榮え、さざれ石の巖となりて苔のむすまで榮えても、終局となるべきではない。

千とせ經ばまた萬代と祝ひてむ
つひには限なしと言はまし

眞に天壤無窮でなくてはならぬ。これ日本臣民の誰しも思ふ所ではあるけれども、翁の思は殊に切

なるものがあつたのである。

萬代といふいつはりも君をしか
あらせむとおもふ誠なりけり

この至誠が腦底に潛んで居る。故に時に當り事に觸れては、

花見ても紅葉を見ても大君の
御代のさかえをまづ思ふかな

となるのである。

幕威隆々の時、國民の多くは封建の雲霧に蔽はれて、皇室の尊嚴にましますべき所以を知らなかつた。此の時に當つて、國民の精神界に一道の光明を射込んで、梅田雲濱らのいはゆる

君が代をおもふ心の一筋に
我が身ありとも思はざりけり

の如き熱誠を生ぜしめたのは「御國まなび」を主唱した人々である。翁もまた其の「御國まなび」の流を汲まれた。故に翁の先輩を崇敬せられる情は頗る厚かつた。荷田春滿を詠じては、

稻荷山たかき敎をおこしたる
　　杉の羽倉のおきなたふとし

と崇拜し、加茂眞淵を詠じては、

遠つあふみ遠き昔の跡とめて
　　たかき調を世に知らせけり

と推賞し、本居宣長を詠じては、

鈴のやの敎うれしく世の中は
　　やまと心になりもゆくかな

また其の五十年祭に、

朝日かげにほふ櫻の下かげに
　　よる人多く世はなりにけり

と歡喜し、平田篤胤を詠じては、

知る人のいかでなからむ昔いま

　　こと國かけて一人をとこを

と歎美せられた。これ翁が夙に內外本末といふことに留意せられたからである。

我が國體の尊嚴なる所以は、「御國まなび」の研究によつて明となつた。苟も日本に生れながら日本を親愛せぬ者はない筈だけれども、その國體を究明すれば、殊に親愛の情が增して來るものである。故に是等の先輩は「御國まなび」を學問の本とせられた。翁は「國學」といふのよりも「モトツマナビ」といふ方が適當であると唱道せられ、この「本つ學」を日本的精神涵養上の緊要事とせられたのである。

やまと人そのもろこしを本にせし
　　こころを學べ取りなほしつつ

日の本の大路をゆきてをり〳〵は
　　からの小路に立ちよりて見よ

日の本の本な忘れそもろこしの
　　ひじりの道はかしこかれども

これ、しかしながら外國の聖賢の教を疎にせよといふのではない。故に、をり〳〵は唐の小路にも立ち寄りて見よといひ、

日の本のもとつ教の枝葉こそ
外つくに〳〵に生ひ茂りけれ

とも詠んでおかれるのである。ただ凡眼の人は好む所に僻し、學ぶ所に偏する者であるから、

もとにつきかたみに救ふ日の本の
もとつをしへぞ道のもとなる
あめつちの本つ教を知らずして
するにまどへる人ぞかなしき

などと詠まれてある。國學の隆盛を極めるに當つては、漢學は殆ど壓倒せられる氣味合であつた。けれども、その頃から、我が國にも西洋かぜが吹き初めた。一難去りて、また一難來る。憂國の情ある者は袖手傍觀するに忍びない。賣佛僧が居睡する寺々の鐘をつぶして、大砲を鑄たまふ英斷の藩主さへあつた。翁は此の藩主の「今よりは心のどかに花や見む入相つぐる鐘を聞かねば」といふ

歌を聞かれて、

海原にまたひざくらや散らすらむ
いりあひ告げし山でらのかね

と詠み、また自ら馬の繪をかいて、

言さへぐ西のえみしの荒び來ば
ひづめにかけよ日のもとの駒

と慷慨せられた。この世界における最貴最尊の國に仇なす者があらば、國民は心を一にして、猶豫なく之を擊ち攘はさねばならぬ。翁の

すみつきしえみしを拂ふ神風は
人の手よりぞ吹き出だしける
神風の吹くをなまちそ吹かぬまに
たかき國ぶり知らせこしがな

と詠まれたのも、その意である。しかしながら、翁は決して退守的の人ではなくて、雄大なる進取

的精神の横溢した人であつた。

翁は我が國家の成立を研究し、その保護防衛の必要を思はれたのみならず、領土擴張を欲して居た人である。否、翁の理想は大帝國主義であつて、我が皇室が世界に君臨しますのを以て最大目的として居られたのである。この思想は詠歌の上にもあらはれて居る。國家の保護防衛に關しては、

おやのため惜む命を君のため
すつべき時にすつべかりけり

と決心し、

人ごとにやまと心をかためなば
えみしの千船なにおそるべき

と激勵し、また時には、

湊にもあらぬ心にこと國の
船はかかりてはなれざりけり

と憂慮し、おのが戈執りて國敵に對ふにはあらねども、如何にもして、國論を一致せしめようと、努力はせられたが、幕末擾亂の際、儒學者や、蘭學者や、議論が區々に分れて、歸一しがたい事もおほかつたので、翁は嗟嘆して、

國のため我がつく息の甲斐なくて
世のくもきりを拂はざりけり

と歌はれたこともある。これ、翁は我が建國の精神を推究して、我が天皇が宇内に君臨し給ひ、萬國は何れも歸順すべき道理あるものと信じ、また外敵を邀へ擊つが如きは小攘夷にして、戰はずして之を說破し、彼をして尊皇の心を起さしめ、内外人の皇威を蔑視する心を攘ひ去るのを以て大攘夷であると信じて居られたからである。文久年間における薩長の義擧を賛したる翁の長歌がある。

八雲立つ　出雲八重垣　垣こそは　君の御楯と、
隔つべき　物は隔てて、　通すべき　物をば通せ。
垣まもる　心たがへば、　通すべき　物を隔てて、
隔つべき　物をぞ通す。　垣まもる　前つ君たち、

己が家の　榮おもひて、　物を通さず。
水つどふ　大江の君は、　隔うれたみ、
焚木樵る　鎌倉山に　議り定めて、
天の下　軍のきみに　申さしめけり。
世の中の　移ふ思へば、　定めありけり。
鎌倉ゆ　薩摩に下り、　長門に移り、
各も〳〵　知召す間に　六度過しつ。
吾妻なる　軍のきみも、　違ひたりけり。
西のうみ　夷のともも、　似てしもあらず。
船よそひ　おして參來て、　物かへつべく
契りおく　事ぞおこれる。　都あづまと
御心の　あはぬ由あり、　遠音に聞きて、
薩摩より　長門より出でて、　東にくだり、
通すべき　その垣の　事はかり　まつり事　定めなく　安藝を經て　ももとせを　そのかみに　いにしへに　年の端に　それにより　由ありと　鳥がなく、

打日刺す　京にのぼり、　世の中を　勞きませば、
隔つべき　夷へだてて、　通すべき　我が大君の
勅通せり。

反歌

しきしまの大和心と遠つ祖の
いさを繼ぎつつ事なしをへつ

これ抽象的の辭句多き叙事詩であるから、事象の明瞭をかいて居る嫌があるけれども當時の事情に通じて居る者には、翁の精神を窺ひ見ることが難くはない。

維新前後の志士と言はれるほどの者には、すべて激烈なる尊皇の心があつた。けれども、わが天皇が宇内に君臨ましますことを理想として居た者は幾人もあるまい。翁は邦人中稀に見る所の大理想家であつた。大國主命を詠みては、

大國の主とはいへどつちの上は

みな大きみにたてまつりつつ

豐太閤を詠じては、

すめらぎに奉らむと苅りそめて
苅り果てざりきもろこしが原

加藤清正を詠じては、

草も木もきりなびけつつ悔しくも
はてを見ざりきもろこしが原

と歌はれたのを見れば、帝國領土の擴張を希望して居られたことは明である。それのみならず、濱田彌兵衛の事を稱揚して、「我が國のみいつ示しし濱田はも國のまめ人、外つ國の書よみふけり、外つ國を恐りかしこむ博士らは國の罪人、しかにはあらじか。」と詠まれたる意氣は大に欽仰すべきものがある。

けれども、侵略や遠征は翁が最後の理想ではない。叡聖至仁なる我が皇室の恩威が六合にわたり八紘を照臨しては、

大國隆正

末竟に言葉異なる國もみな
をさをかさねて物みつぐらむ

ともなり、

末竟に外つ國々の人もみな
本つをしへによらざらめやは

ともなるべきものと信じ、かつ本學本教の普及によつて、

仇と見るえみしが伴を末竟に
貢のふねとなさで止まめや

宇内の外國をして我が帝國に朝宗せしめようとする意志の確乎たるものが有つたのである。翁は此の遠大なる志を齎して、明治四年八月十七日に病歿せられたけれども、

わが立つる道のさかえを末遠く
死にても死なぬ世にありて見む

といふ遺志は彌つぎ〳〵に紹述せられて、大日本建立の實現に近づかうとしつつあるのである。今や

我が帝國の世界における地位は最優とは言はれぬけれども、既に一等國の伍伴に入つて、優に列國の景仰を受けつつあるので、國民の器局も漸く雄大を加へて來た。東人來り、西人訪うて、應接に忙しくなつて來た。想ひ起せば、先年墨西哥答禮大使の來朝した時、自分も太平洋を隔てたる隣邦の國民に對して、精神的に日本帝國の特性を知らしめるつもりで、その旅寓を訪問したけれども、折あしく大使の不在で、面晤する機會を得なかつた。そこで、日本人の情愛を吐露した書面を添へ、自著『日本魂の新解說』を一部は大統領ウエルタ氏に、一部は大使デラバラ氏に贈るべく遺して歸宅したが、これに對して大使から懇到なる禮狀が來た。かくの如く人々が各自の地位相應に國威の宣揚に努める時は、我が帝國の地位は漸々翁の大理想にも進みゆくであらう。翁たる者また首肯する所あるか。

大帝國主義を懷いて居られた翁の歌は、時々鋒芒をあらはした。翁の所見と性格との一面は、その歌の上にも能く發露せられてゐる。けれども、これ眞に翁の一面である。豪放不羈なるが如き翁は、他の一面において、情緒綿々たる優しい性質をも有して居られた。江戸に居りがたきことのあつて、大阪へと出で立たれた翁は、さすがに故鄕の戀しく慕はしく、

ひとつゐごとに遠さかりゆく

と詠んで、箱根の雲、富士の雪、ふりかへりつつ西の空へ向はれたのは、菅公が「君がすむ宿の梢」と詠まれた情と同じでないか。また久しく京攝の間に住まはれて、嘉永七年の冬江戸に來り、再び京へ歸るとて江戸を立たれたのに、東海道で地震に遭ひ、家の多く潰れたのを目擊せられて、悲慘やる方なく、

來む年はさぞ惑ふらむつばくらめ
　　そのまま立てる軒しあらねば

とて、惻憾の心を歌はれたのは、德禽獸に及ぶといふべきではないか。翁は意志の人であると同時に感情の人である。

花を見ても、鳥を聞いても、風に吹かれても、月に照らされても、翁は恍然として我を忘れるばかりであつた。春が翁の身邊に訪づれて來ると、翁の心は野に山に誘ひ出されるのであつた。翁の春の歌を見よ。

花にほふ春は來にけり今よりは

いとまあるひとぞ暇なからむ
花咲かぬ山とも言はず棚引きて
隔てぬものぞかすみなりける
いつとなく綠茂れる竹むらに
春はありけりうぐひすのこゑ
春雨は靜なれども花ゆゑに
こころの中のさわがしきかな
わが惜む雁のゆくへを常世にて
かへらむ頃と待ちわびぬらむ
菫さく野べに立ち出でて家づとに
つまむとすればうぐひす啼くも
かばかりは雲も立たじと思ふまで
花咲きつづくみよし野のやま

花咲けば山にけはしき人目かな
はるは何處に世をや避けまし
花かげに二日三日四日すぐしけり
いつかと家のひとは待つらむ

花影鳥語、何ぞ翁を惱殺するの酷しきや。しかも、

都人かへりし後の嵐山
花は月にぞ見るべかりける
人はみなかへりて後の隅田川
月にぞ花は見るべかりける

の諸詠による時は、東西兩都の花を獨り擅にしようとしたのである。殊に

漢書に心迷へる人だにも
さくらの蔭はよきずもあるかな
のどけきもかひやなからむ外つ國の

絶えてさくらのあらぬはるべは
大君のかはらぬ國のさくら花
よそには咲かぬにほひとぞ聞く

と高く嘯いたる翁は、おのれひとり櫻花の知己であるかの如く心得て居たのでもあらう。また翁の夏の歌を見よ。

夏山は花のしら浪しづまりて
みどりの海と見えわたるかな
笛にきる末も知られて若竹の
日ごとに高くなりまさるかな
あけばまづ誰にかたらむ時鳥
月澄める夜のあかつきのこゑ
天の戸も天つ水雞やたたくらむ
見るまに明くるなつの夜の月

その原に咲く撫子やははき木の
つゆを乳房と生ひ立ちぬらむ

みづ〳〵しい若葉の緑滴らむとする、蠕々たる新竹の天を衝かむとする、曉月に血に啼く時鳥、殘月に戸をたたく水雞、朝露にはぐくまれる撫子、彼は翁の心を慰め、是は翁の情を惱まし、一は喜ばせ、一は驚かす。夏の神は翁の仇か友か。秋の神もまた翁の仇か友か。或物は翁を驚かし、或物は翁を喜ばす。

秋もなほ知らじとおもふ我が宿を
いつ誰が告げて風かはるらむ
月影の入りにし後はひとり我が
こころをうつす狹のあさつゆ
霧の海はれゆく風の名殘には
ちぐさの波の寄する野邊かな
啼く蟲のありか見えねば百草の

花にこゑあるここちのみして
いひしらぬ紅葉の色やくちなしも
こきくれなゐもうち交りつつ
よるながら夜の錦になさじとや
もみぢをあきの月てらすらむ

多感多情の翁は、風に驚き露に驚き、野の花に、山の楓に足を停めて詠歎する。詠歎すれば、默想する。默想すれば、玆に風も露も野花も山楓も美辭となり麗句となりて、纖巧なる歌が出來上がつたのである。

をち方は雲にかくれつその雲に
かくれし方やしぐれなるらむ
拂らはむと取りし箒をさしおきて
ちりしく庭のもみぢをぞ見る
八千草に咲きつぐ霜の花に今朝

さす日影こそあらしなりけれ
すぐしてし櫻うの花しら菊や
つもりてには雪となりけむ
しら雪は波とつもりて炭がまの
けむりぞ山のみをづくしなる
何事も人におくるる我が宿に
春待たで咲くうめもありけり
世の中の春のいそぎに急がれて
急がぬ身さへいそがるるかな

冬の歌もまた華麗にして纖巧である。蕭條たる時雨の野景も、清楚にして單調なる雪の景色も、一たび翁の詩囊に入りて、渾化せられ、醇化せられ、美化せられる時は、恰も田舍人の久しく都會に停りて、美容術の修練を積みたるが如く、交際術の奥義を心得たるが如く、人を魅する一種の魔力を生じ來る。殊に翁の得意なる美化法は、巧に隱喩法を應用することである。翁が一旦この法を應

用せられたところには、無生物も躍如として生動し、非情の物も或は悲み、或は喜び、或は怒り、或は笑ふ。

翁は此の様に短歌に長じて居られたばかりでなく、長歌にも巧であつた。前に掲げたる詠竹歌や薩長二侯の功績を賛したる歌は、その著『眞爾園翁歌集』に採收せられて居らぬが、歌集に採收せられたる長歌の題材にも多少奇拔なところがある。月といひ、月前花といふが如きは、誰も採る所の題材であるが、延縮といひ、蛭子といひ、濱田彌兵衛といひ、龜といひ、尊内卑外といひ、犬鳴山といひ、筆硯紙墨といひ、米といふが如きは、題だけでも讀者の注意を惹くべき價がある。延縮といふ題には、

空せみの　世は様々と
昔より　言ひ繼ぎにけり。
鶴はしも　頭もあしも
立ちのびて　長くもあるかも。
亀はしも　頭もあしも

縮まりて　短くありけり。
長かるは　千年をふとへ、
短きは　萬世ふとへ、
いふがごと　經るものならば
長きより　みるめ短き
其の方ぞ　齡まされる。
うべな〳〵　身を謹めば、
身を保つもの。

また米といふ題には、

助け合ふ　道ぞ畏き。
獨して　如何で結ばむ。
天地と　結ばりてこそ
世の中の　物は出來れ。

めをふたり　　結ばりてこそ
世の中の　　人は出來れ。
天地の　　神ましまして
人の世を　　助け給ふと
いにしへゆ　　傳へ來にけり。
種もあり　　所もありて
稻は世に　　絶えずあらめど
そを作る　　人しあらずば
いかにして　　さはに出で來む。
まくり手に　　うゑ渡しつつ
むか股に　　水沫かき垂り
夏の日は　　はぐさかりうて
秋の日は　　刈りてこなして

その上に　　臼につきつつ
また更に　　水に洗ひて
米となし　　酒と造りて
命つぎ　　祝ひ樂む
かくてこそ　　尊かりけれ。
然れども　　神いからひて
風あめの　　はげしき年は
實るべき　　由こそあらね。
人の世も　　みだれ戰ひ
作るべき　　時うしなへば
いかでかも　　稻はみのらむ。
そこもへば　　身もたな知らず
取り作る　　人もかしこし。

助けます　　神もかしこし。
天と人と　　うち合へる年ぞ
嬉しかりける。

と詠まれてある。いづれも五七の調律が整うて、着想が眞率であるのは、一見何等の奇なく、何等の妙なきが如くであるけれども、老練の作といはねばならぬ。殊に米の歌の如きは、我が瑞穗の國の民草の長へに愛誦するに足るものである。けれども、これらよりも、翁の精神を發揮したものは尊内卑外の歌である。

菰まくら　　たかきの神の
あめ地を　　作らしし時
この國を　　本とさだめて
とつ國を　　末と掟てて
あめ地の　　本つをしへと
千早振る　　神のふる事

天皇の　　みすぢと共に
遠ながく　　天地のむた
この國に　　とどめ給へり。
かくばかり　　畏き國に
嬉しくも　　人と生れて
いかさまに　　人思ふらむ
外つ國の　　道に惑ひて
聖こりすも　　佛こりすも
あはれ世の人。
神の道とけば貶しめ外つ國の
　をしへによれば人たふとぶも
よし人はおとしめぬとも毀るとも
　みちおもふ心あに撓まめや

の如きは、警拔なる長歌として、今日においても、或一部の人には必ず示さねばならぬものである

要するに、翁は主義の人である。しかしながら、閻浮統一の雄志を繼承して居る且本民族は、小天地の間に跼蹐してゐてはならぬ。八方に雄飛して活動すると同時に、寛仁なる包容主義を持ちて儒教をも、佛教をも、基督教をも、回々教をも、列國聖賢の教訓をも研究し、その精粹を以て日本魂を培養滋育することが必要である。自分は大理想を抱いて居られた翁を追懷すること切なる一方において、また此の國民の精神上に包容主義の大日本を建設し、その基礎の上に閻浮統一の大事業に精進せむことを熱望する者である。

(四) 江藤新平

佐賀は薩長土肥の肥で、明治維新の際、有力なる大人物の輩出した地である。藩侯閑叟、その子直大、副島種臣、大木喬任、佐野常民、大隈重信、江藤新平は、その中の七傑といはれて居る者である。この七傑、今や生存する者は一人もない。自分は嘗つて此の中の直大と重信とに面談したことがある。侯直大は豐麗の風姿ありて寡默、さすがに雄藩の主たる温容があり、伯重信は豪宕の相貌ありて多言、とてもかくても他人に下らざる厲氣があつた。その態度性格は大に異なる所があるけれども、人を威壓する感があつた所は同じである。此の他の五人もまた大に燦然たる異彩を放つて居たに違ない。茲には江藤新平について、その一斑を窺つて見ようと思ふ。

新平の家は、世々佐賀の鍋島侯に仕へて、足輕格であつたが、父助右衛門胤光は至つて樂天的な人で、武士の嚴肅な作法を好まず、晴間村といふ邊鄙に引退して、村の青年どもに圍碁と淨瑠璃とを敎へて居た。かゝる樂天的な人の子に、新平の如き俊邁狷介な者が生れたのは、一奇といはねばならぬ。新平の生れたのは、天保五年二月九日である。此の頃、佐賀藩では、人才敎養の必要を看

破して、弘道館を建て設け、嚴重な校規によつて、大に教育を督勵したので、新平も年頃になれば弘道館に就いて學業を修めるに至つた。けれども、彼の家は貧窮で、成規の學費を支給することが出來ない。從つて、他の學生と同樣な待遇を受けることが出來ず、他生の食事する時にも、彼は共に飲食することが出來ず、大聲を張り上げ書籍を朗讀して居る外はなかつた。彼は幼時より早くも世の辛苦を嘗めたのである。この空腹を忍びつゝ書籍を朗讀してゐる幼年讀書家、これ既に悲哀詩ではないか。

貧家の子弟は、みづからの努力によつて、新しい境遇を開拓せねばならぬ。この苦境に立つて居ることに氣が附いて居る者は、能く努力する。みづから勇んで努力する者の前には、千辛萬苦も殆ど何等の障碍とはならぬ。新平は貧に處して貧に恐れず、ひたすら心を讀書に潛め、一心不亂に勉學してゐるので、少しも世事に頓着しない。人から「學問好なのはよいけれども、あれでも困る。」と批評せられるに至つた。ある年、實弟源作とか云ふ者が長崎に出奔したので、新平は父から長崎へ連戻しに往けと命ぜられ、發するに臨んで、行李の中には、書籍が滿たされて居る。父が怪み問うたのに、新平は事もなげに「もし長崎行に日數がかゝる時は、いたづらに讀書をさまたげられるからです。」と答へた。彼は讀書より外のことは毫も心に留めない。彼は讀書狂であつた。

この讀書狂なる少年が、讀書によつて他人の侮辱を免れた物語こそ、興味ある挿話である。その頃、佐賀藩では、家中の婦女子が日常窮屈な境涯に居らねばならぬ苦を察して、一年に一日、女の氣保養として、女が途中で如何なる男子に出會つて、如何にからかつても差支ないといふ風習が出來て居つた。この日には、女は五五七七連れ立つて、要所要所に陣を張り、男子の通りかゝるのを待つて居る。これを知らぬか、延つ引ならぬ用事のためにか、此の娘子軍の陣地に差しかゝるが最後、如何なる威嚴ある武士でも、たゞは通されない。包圍攻擊をうける。こそぐつたり、胴揚したり、思ふ存分なことをせられても、少しも腹立てることはならぬ。そこで、此の日は、男子にとつては、一種の情味深い厄日であつた。かゝる奇例も、あればあるもので、先頃まで前田侯爵家の家風として、毎年の勘定日に、女中と重立つたる出入商人との間に行はれて居たとか。さても、新平が十六七の頃、書籍を脇にかい込んで、それとは知らず差しかゝる一筋道の長畷、はるか目先にさめいて居る女の一群、南無三寶しくじつたとは思つたけれども、男兒の意氣地、引きかへしもならず、やゝ煩悶の末、一策を案じ、聲高らかに『孟子』を朗讀しつゝ、足の運も勢よく女の群に

「衝いて入つた。そこで、さすが逸を以て勞を待つたる娘子軍も、少年讀書家の氣にのまれてか、たちまち颯と道を披き、何事もなく關門を通過せしめたといふことである。また彼が石井新右衛門の漢學塾に入舍した時、他の古參塾生どもが、新參にして書物も携へぬ新平に『大學』を講義せよと迫つたのに、『大學』を暗誦しつゝ講義したので、先の侮つて居たものも、大に舌を卷いて、そゞろに畏敬の念を生じたとか。

『孟子』を音讀し、『大學』を暗誦したといふ物語によれば、純然たる漢學書生であるけれども、彼の父が或人の世話で海外貿易事務取扱方となつたので、彼は始めて海外の新空氣に觸れる境遇に立つた。その關係からでもあらうか、二十一歳の時は、自身も貿易方の小吏となつた。しかし牛刀で鷄を割くの思ある彼は、あまり精勤もしなかつたと見えて、上役松野半助から無能だとて叱責せられたので、漸く目を覺ましたか、これより二人前の仕事をしてのけるに至つた。のみならず、老練なる算數家すら難しとする計算をば、事もなく算出して、上役の目を丸くさせたこともある。

嘉永や安政の際は、國事多難で、天下の志士は、みな血を沸きかへらせたが、萬延元年の櫻田事變や、文久二年の坂下事變に至つて、正に其の極に達したのである。新平も時勢の日に非なるを思

うては、僻遠なる片田舍に跼蹐してゐるに忍びず、活眼を開いて、身を國事に委ねる決心をなし、文久二年六月二十七日一篇の上書を遺して、なつかしい佐賀の城下を出で、口吟して曰はく、

欲レ報ニ邦家海嶽恩一　慷慨杖レ劍出ニ關門一
晨星落々風蕭々、　毛髮衝レ冠肝膽寒。

長汀曲浦の旅路はるかに京都に上りて、四方の志士と交り、大に國事に奔走しはじめた。外交條約の締結についての私見を認めて、禁闕に奉つたけれども、省みられなかつた。木戸孝允とは親しく交際して、意氣投合したが、幾ばくもなくして、京都を去り、佐賀に歸つた。歸れば、脫藩者として取扱はれ、死罪に行はれようとしたのを、藩主閑叟侯によつて死を赦されたので、是より藩中に重きをなしたのである。

暫く閑散になつたから、寺小屋を開いて、村童を教育することとした。ところが、初は多く集まつたけれども、後には漸く減つて、遂には來り學ぶ者がない。しかも、新平は少しも頓着せず、無住の荒寺において、煤けたる佛像を相手に、たゞ讀書三昧に耽つて居た。時に幕府が長州を征伐する企があつて、佐賀もまた幕府より出兵の命を受けた。新平は重職原田小四郎に書を寄せて、局

外中立の態度を執らしめようとしたけれども、藩は遂に出兵した。また三條實美公らの太宰府に逗り居られた時の如きは、新平は潛に公等に謁して、時局救濟に關する意見を陳べたところ、三條公らからは「若し我等の世に出る折もあるならば、相携へて天下の事を計らひませう。」など、行末の相談があつたといふことである。

新平の思想は、幕府を倒して、王政を復古するのみならず、海軍を擴張して無道の國を攻め、世界の人才を招き用ゐて、國家の宿弊を改革し、航海通商を盛にして國富を充實し、蝦夷を開拓して露國の東侵を防ぐなどの積極的政策を持つて居たので、かねて安政三年の秋既に、『圖海策』と題して、此の意見を草したことがあつた。慶應元年には書を藩侯に上つて、天下經綸の策を建て、幕府討滅を論ずるに至つた。けれども、藩論は未だ一定する所がなかつたので、新平の意見は餘り人を動かすこともなかつた。然るに、三年には明治天皇の御踐祚があつて、王政復古の大業が行はれたから、天下の大權は朝廷に歸するに至りて、藩論も忽ち一定して、闕下に拜跪することとなつたので、藩主は太く新平が先見の明あることに驚かれ、三年十二月蟄居は赦され、破格の拔擢によつて、監察といふ重職になつた。明治元年新平は藩の重職といふ格で、京都に上つて、天下の形勢

を察するのに、討幕軍としての諸侯は去就に迷うて、しきりに低徊遲疑して居るにかゝはらず、佐賀藩は一議にも及ばずして、朝命を奉じたから、薩藩の如きは、佐賀の心事を疑うて、佐賀藩討伐の議をなすにさへ至つた程である。新平の精神が那邊に在つたかは、推測するに難くないではないか。

明治政府の重臣としての江藤新平が功勳は、今更多く述べる必要もあるまい。明治元年には諸道軍監となつて、總督府に隨つて江戸に下り、江戸では司法行政の事を掌り、江戸奠都の事を首唱し、中辨（內閣書記官長）となり、文部大輔となり、明治五年四月には司法卿となつた。この司法卿時代は、彼の最も敏腕をあらはした時代で、かの尾去澤銅山事件や、山城屋事件などにおいて、或は井上侯馨をして大に苦惱せしめ、山縣將軍有朋をして最も戰慄せしめたが、此の兩事件の如きは、みな曲は井上に在り山縣に在り、直は江藤にあつたのではあるけれども、水淸ければ魚栖まずで、江藤は大に人の怨恨を招いた。彼が、

急がずば濡れまじものと人は言へど
急がでぬるる時もこそあれ

と述懐したのは、或は此の間の消息をもらしたものではあるまいか。けれども、彼が北畠治房とか兒島惟謙とかいふ人才を任用して、情實の多い官海を彈劾し、司法權の確立のために努力した功に至つては、我が明治史の上に特筆大書せねばならぬ偉功である。そのほか、人身賣買の禁止の如き、民選議院設立の建議の如き、いづれも彼が腦漿をしぼり出したる心血の塊である。

彼が最後の輝をあげたのは、征韓論である。征韓論は、要するに韓國の無禮を詰らむための大使派遣論であつて、大使希望者は西鄕隆盛、これを賛成した者は江藤新平、板垣退助、副島種臣、後藤象次郎など、また反對者は、大久保利通、木戸孝允、岩倉具視、大木喬任、大隈重信などが主なる者で、三條實美公は中立者ともいふべき地位であつた。これに關しては、たび〳〵閣議が開かれたが、遂に征韓論者の敗に歸した。佐賀の亂は全く之に原因するものであつた。佐賀の亂における新平らの心事に至つては、大に諒とすべき所がある。けれども、到底新平らの失策たることは蔽はれまい。これは西鄕隆盛の騷亂も、蓋し同じ徑路を踏んだものである。

しかも、西鄕隆盛が十年の亂で大に天眞爛漫なる性格を發揮したるが如く、江藤新平の性格は佐賀の亂によつて殊に遺憾なく發揮せられて、彼の生涯をして全く詩化せしめたのである。彼は不平

憤懣の情を抱いて刑場の露と消えた。彼は失敗の人である。しかも、彼の生涯は一種の活詩である。更に彼の文學的作品を吟味し來る時は、詩人新平の眞面目は躍如として現出するを覺えるのである。

花のお江戸が花の東京となつた。東京の奠都は明治二年三月に行はれたのであるが、江戸遷都の首唱者は實に江藤新平と大木喬任とで、慶應四年四月一日附を以て建議したのである。これより先同年正月大久保公利通は大阪遷都の議を上つたけれども、その議は用ゐられなかつた。花のお江戸をして花の東京たらしめるのは、新平らの理想であつたが、しかも、その理想は事實として現れるに至つた。陽春の日うららかに、風あたゝかなる頃、東京遷都の首唱者たる新平らが花の下に逍遙したる時の愉快は如何ばかりであつたらう。その

墨田川波間にまよふ白雲は
つゝみの花の香にぞありける

といふ歌の如きは、何等の奇もなく何等の妙もないけれども、江藤の作として見る時は、得意滿面なる豪傑の爛漫たる花の下に停む姿が幻となつて現れるではないか。これを勝海舟の、

飛びちがふたまの響に散る花を

袖にうけしもむかしなりけり

に比べる時は、前者の揚々として樂天的なる、後者の悒々として沈鬱的なる、まことに人をして當年の境遇の差異を想はしめるに足るものがある。彼が維新當時の地位は、土方楠左衞門（久元）や島義勇と同じく、文勳者の中では屈指の俊物であつたのである。

けれども、維新の功勳者としては、文勳者としての木戸孝允、大久保利通、廣澤眞臣、大原實德、武勳者としての西鄕吉之助、大村益次郎、吉井友實、伊知地正治などに比べて、新平の地位は遙に卑かつた。明治二年十月朝命によつて、中央政府の中辨となつた時の如きは、着替がないので困り親戚より贈つて貰つた手織の羽織袴を着て、上京したとのことである。その窮迫の情狀は察すべきではないか。それに引きかへて、薩長諸士は傲奢を盡して、大に威權を張つて居た。その間に立つて、彼が文部大輔となり、更に司法卿に昇任して、司法權の確立を創成した手腕は、實に凄いものであつた。暴風に揉まれる喬木は、その枝葉も幹も保ちがたく、怒濤を押し切らうとする小艇は、その棹舵も船體もこはれ易いものである。彼は司法權確立のためには、多〻の犧牲を拂つた。薩長

人からは毛蟲の如く忌まれ、蛇の如く嫌はれたであらう。殊に征韓論の破裂は、ます〳〵彼を昏迷の地位に置いたであらう。秋風秋雨吹く毎に降る毎に增しゆくものは愁人の情である。彼は此の蕭颯たる秋風に逢つて、

うき積もる憂世の中はなか〳〵に

おもひ絕えよと秋かぜの吹く

と沈吟せずには居られなかつたのである。春風に柳の髮なびき、春雨に花の脣ひらけば、世の人は皆浮き立つけれども、明治七年の佐賀における一擧、縱橫の計成らず、志いたづらに存して、薩摩に舊友を訪ねたけれども、その翼賛を得ず、土佐に前誼をたどつたけれども、その庇護を得ず三月二十七日終に四國において捕縛の身となつた。胸中に藏したる萬斛の經綸も今は何の爲す所ぞ

杜鵑聲待ちかねて終にはた

月をもうらむ人ごころかな

その憤恨の情は血を吐くばかりであつたらう。けれども、當時彼等を救護するほどの同情者は無かつた。彼は佐賀城畔櫻花の散り盡したる四月十三日に、

國をおもふ人こそ知らめ益荒雄が
心づくしのそでのなみだを

といふ一首の歌を書き遺し、更に「たゞ皇天后土の我が心を知り給ふばかりだ」と呟きつゝ、やがて首を落されたのである。嗚呼、僅に四十年なる彼の一生は、實に浮沈榮辱の縮圖である。彼の詠歌は、この縮圖の一斷片にすぎない。

されば、彼の詠歌の物に見えたるは、たゞ右の數首ぐらゐなものである。彼が詠んだ歌の數は實際に少いであらう。たとひ此の數首の中に英雄の國を思ふ心情がほの見えて居るにしても、歌人としての江藤新平には、あまり多くの批評を下すべき材料がない。しかしながら、彼の一生における浮沈榮辱が一種の詩であるばかりでなく、その浮沈榮辱に處したる彼の態度が更に大なる無聲の詩である。比の無聲の詩は、彼が性情の反映である。この詩的性情ある彼が、國歌の作者としては、何等の努力した蹟を認めがたいけれども、彼は其の詩人的勢力を多く漢詩の方面に傾注したのである。

彼の漢詩は『南白遺稿』などによつて窺ふことが出來る。

江藤新平

萬里東風度、　千山草木新、
我公征未レ返、　遙拜二崎陽春一。

は嘉永甲寅元旦の作で、去年このかた露使プッチャチンが長崎に來て、互市を要請して居るから藩侯の長崎に往つて監視して居られるのに對する情である。彼が心は公明、彼が行は正大、時に峻烈にして常軌を脱するが如き事あるは、憂國の心情の熾烈なのに因つてである。

悠々天下是、　何者與レ于レ余、
百歲豈空送、　寸心猶未レ舒、
臥思二今世務一、　起讀二古人書一、
慕二彼楠中將一、　殺レ身護二帝居一。

の如き、

皇室久衰夷狄尊、　滿腔忠憤吐二何邊一、
一封密奏回天策、　淚濺東山秋暮煙。

の如き、よく其の忠誠の至情を察せられるではないか。彼が京都における見聞を錄したるものに、

四姦とて、久我右大臣建通卿、富小路二位政直卿、岩倉右少將具視朝臣、千種左少將有文朝臣を擧げ、五賊とて、九條殿六位侍、二條殿與力重次郎、若州用人兩人、江州彦根藩長野主膳を列記したものがある。こゝに擧げられたる者が果して姦賊なるか否かは、容易に斷ずることは出來ないけれども、彼の意の存する所を察することが出來る。世には憎むべきものがある。けれども、權勢の地位を利用して私利を貪り私曲を遂げる者ほど憎むべき者はない。彼が鎌倉曲と題したる、

鎌倉有二高臺一　灼々玉欄回、　芳冥春宵短、
明月照二玉杯一　美人歌且舞、　瓏々氷玉姿、
清商從レ聲發、　長袖從レ步開、　淡々清綠酒、
金盤佳肴堆、　佳肴與二綠酒一　不レ如二美人情一、
美人情何深、　唯言他生因、　不レ厭二豫山遠一、
何處不二隨臻一、　不レ厭二豫山險一、　何處不二隨行一、
唯得レ事二夫君一、　不レ厭二苦與レ辛。

といふ詩は、斬魔の劍を以て、阿部伊勢守正弘の豪奢安逸を刺したものである。正弘は幕末の重臣

として、みづから兵馬の權を握りながら、國事多難の時をも顧みず、怠慢にして日夜酒色に耽つて居るのを見て、彼は憤慨に堪へず、この詩を作るに至つたのである。今日もまた多くの阿部正弘あるを見受ける。彼をして今日に在らしめるならば、また葉山の曲や、逗子の曲や、大磯の曲や、輕井澤の曲などを作るであらう。多くの斬魔劍を振ふであらう。

とにかくに、彼は正義の士である。正義の前には情實あることを許さない。正義を斬魔劍として情實の伏魔殿を勦絶せずには止まないのである。彼が明治二年佐賀に歸つて、藩政改革に努力した時には、改革事業は破竹の勢で進んだ。けれども、藩の不平者は彼を刺し殺さうとした。彼が司法卿となつて、京都や大阪の府政を改革せしめたのも、山城屋事件で山縣將軍有朋を惱ましたのも尾去澤銅山事件で井上馨侯を苦めたのも、かれの正義を愛する性格から出たことである。この性格は、彼の劍と題したる、

吾有二三尺劍一　藏在二寶匣裏一　五年勉洗レ此、
十年勉磨レ此、　磨以二奇異石一　洗以二清潔水一、
瑩乎氷霜質、　光輝何凛森、　銳利猶未レ試、

抱持至レ于レ今、　悲風吹ニ林樾一、　悵然傷ニ我心一。

といふ詩などには、よく顯れて居る。彼は畏るべくして、親むべからざる人であつた。たとひ或は親むべくとも、決して狎れることの出來ない人であつた。彼を器に譬へるならば、劍であらう、玉ではない。彼を花に譬へるならば、白蓮であらう、牡丹ではない。近づきがたく、犯しがたいからおのづから腹心の友もなく、金蘭の交もない。彼は心裡に一種の寂しみを感じて居たであらう。その丙寅歳除の詩に、

烏兎荏苒促ニ人奔一、　烈士心中豈可レ言、
才短百方功未レ成、　途窮千里志猶存、
映レ窓柳色春先動、　凌レ舍梅花日自喧、
元是誓要レ明ニ大義一、　隱憂耿耿向レ誰論。

といひ、述懷の詩に、

才子不レ知レ義、　義士才智粗、
海内何以興、　英雄泣ニ窮途一。

といふが如きは、孤影悄然たる英雄の面影が思ひ浮べられるのである。彼は大海の百川を容れるが如き大量の人ではなかつたらう。清濁を併せ呑むが如き襟度の人ではなかつたらう。故に何處までも正義と信ずる一條を貫かうとする。いはゆる才子や俗物は彼の最も嫌惡する所である。彼は勁直孤高の人である、品性の人である。たゞ憂世憂國の心と建勲立名の情とは禁ずべからざるものがあつたらしい。彼が明月の皎々たるに對して、惆悵の情に堪へざるが如きは、其の爲であつたらう。

昨夜之月棄ニ人去一何忙、　今夜之月惆悵使ニ人傷一、
涼風滿レ地雲烟絶、　皎々月色照ニ縈城一、
金殿玉樓光欲レ漲、　千門萬戸有ニ飛霜一、
月宮此去幾千里、　攀レ之直欲レ斬ニ雲鬼一、
天長地遠當ニ如何一、　明月冉々似ニ顧視一、
草庭佇立夜已深、　悠々我胸青々衿、
撫レ胸欲レ詠月滿レ胸、　攝レ衿欲レ舞影滿レ衿、
照レ胸滿レ衿思益切、　明月沈々落ニ西嶺一、

月下殷憂向レ誰發、　所レ思佳人在二吳越一、
温山高兮不レ可レ攀、　諫海深兮不レ可レ涉、
側レ身西望淚濕レ衣、　幾時共語今夜月。

の如きは、少壯時代の作と見えて、盛に美辭麗句を聯ねてあるけれども、この中より美辭麗句の外形を引き去り見る時は、色蒼ざめ骨あらはならむとする一個の憂愁兒を髣髴し來るのみである。

けれども、彼は國家多難の際、多士濟々たる佐賀に生れ、貧家に長じたから、天稟の敏捷機略と相俟つて、嶄然たる頭角を明治史上に立てるに至つたのである。その膨脹的日本を理想とし、進歩的日本を理想として、夙に倒幕論を上り、無道の國を攻略すべしとの議を建てたのも、一片憂國憂世の至誠と建勳立名の志氣とに因り、佐賀の亂に失敗して、心づくしの袖の涙をと絶叫して、その生涯を全く詩化したのも、またあまりに勁直孤高の節操と建勳立名の志氣とが堅かつたからであらう。副島伯種臣は、『南白遺稿』に序して、「中野芳藏者。紹介江藤新平君於余。及與之言、氣魄勃々、奇傑之士也。蓋其爲人、好謀善斷、其成大名於天下者、誠在於此、其招集敗禍於躬、亦在於此。」といひ、大隈伯重信は鹿島櫻巷著の『江藤新平』に序して、

一時の成功者必しも永遠の成功者にあらざるが如く、生前の失敗者亦必しも死後の失敗者にあらざるなり。余輩は近く其の一例を覓めて、明治政府の一先覺江藤南白先生を得たり。先生の最後の酸鼻慘憺を極めたる、眞に失敗者中の失敗者と云ふを妨げず。而かも、時勢の變遷は世人をして再び先生の名を口にせしむるに至れり。此くの如くにして、先生は漸く失敗者の群より脱して、成功者の列に入らむとするものの如し。

といひ、更に語を進めて、

先生生前の志は立憲政治の確立にありて存し、之が爲には藩閥者流と抗爭して、身首所を異にするも、敢て辭せざりしにあらずや。今や國運駸々測るべからざるものありといへども、憲政の前途は尙未だ遼遠の感なくんばあらず。方今憲政の名ありて、其の實に乏しく、憲政の設備完からずと云ふこと無きも、其の之を運用する人を缺ける、一大恨事と云はざる可けむやされば、今日先生の名を憶ふ者は、先づ先生生前の志をしのびて、立憲政治の確定に寄與する所無かるべからす。これ眞に先生を弔ふ所以の道なりとす。

と言つて居られる。佐賀の亂魁としての江藤新平は、その事がたとひ酌量すべき點があつても、

斷じて排斥すべき者である。けれども、新平の性情を察し、その經歷を調べ、その志操を探れば、まことに伯重信の言はれたるが如く、彼には長く世の儀表たるべきものがある。

(五) 木戸孝允

長州藩士和田昌景の子と生れ、同藩の桂九郎兵衛の養嗣子となつたが、その性質が放縱驕悍で、頗る惡戯を好んだ桂小五郎は、いつも母親に心配を懸けてばかり居た。母親は疾みて死にかかつて居る時、小五郎を枕元に招いて、「お前が惡戯の癖を改めない以上は、私は死んでも眼をつぶることが出來ない。」と言ひ置かれるに至つた。そして母親は死んでしまはれた。小五郎は大に怖れて、これから心を改め行を慎み、學を勵み劍を學んで、少しも怠る所がなくなつた。十二歳の時、『日本外史』や『政記』を讀んで、慨然として皇室の衰頽を歎き、幕府の驕傲を憤るに至つた。吉田松陰は小五郎を眞の弟のやうにして指導に力めた。

この桂小五郎が此處に謂はゆる木戸孝允である。孝允は自ら松菊と號して居た。彼は我が長州藩の天下における地位を觀望し、思ふ所あつて飄然と京都に出で、京都の衰落を悲んで、更に江戸に遊び、齋藤彌九郎の門に入つて擊劍を學び、やがて塾長に推された。それから水戸藩の諸名士と交つて、いよ〳〵慷慨悲壯の氣を養ひ、また江川太郎左衛門や勝麟太郎の門に出入して、西洋に關

する話說を聽き、みづから大に期する所があつた。

その頃、日比谷の長藩邸內に有美館が開置されて、擊劍や、國學や、漢學や、洋學を敎授される事となつた時には、孝允は拔擢されて都講の任を帶びたので、孝允の名は四方に喧傳されるに至つた。同じ頃、我が國の近海には外國船の來寄るものが多くなつて來た。米國からはペリーが來て、通商貿易を申込んで居た。幕府は狼狽の體で、役人を派して江戸灣の內外を測量させたり、砲臺を築いたりして居た。孝允は身を變じて土工の群に入り、その工事の樣子を觀察するを得た。或日辨當屋の主婦が、仕事場から來て辨當を使つて居る孝允の顏を熟視して、「お前は唯の土方ぢやおあんなさるまい。」と言つたので、孝允は發覺を恐れて、忽ち逃げ出してしまつた。

時に幕府の威權は何處となく衰へ、倒幕の志を抱いて居る正義の士が四方に出沒して居た。ある日孝允が九段坂の上に差しかかると、「喧嘩だ〳〵」と言つて路人が走る。孝允もまた走つて、その黑山のやうな人群の中を覗けば、小さな男が大きな男の上に馬乘して、拳骨を固めて大きな男の頭を打擲して居るところだ。すると、群衆の二三人が打擲されて居る大男を嘲つて、「大男の馬鹿野郎、大きい癖に小男に組み伏せられて、そんなに幾つも擲ぐられて居る奴があるもんか。小頭

だからつて、遠慮して居るのは馬鹿だ。その小頭をぶちのめして遣れ。大男の馬鹿野郎やい！」と、口々に言るといふ騷だ。孝允は此の喧嘩見物の中に在つて、その小男は小頭であるから大男を呑んで懸かつて居り、大男は組の者であるから頭には勝てぬものと、一目置いて懸つて居るから小男に細み伏せられ打擲されて居るのだと看て取つた。その中に、大男は群衆の罵詈に激勵されたか、小男を跳ね飛ばして、之を組み伏せ、今度は反對に之を打擲するに至つた。孝允は心に感じた事あるが如く、微笑して立ち去つたが、その頃長州と幕府との間に相排擊する事情が生じて居たのである。

長州の藩主毛利敬親は忠誠の人であつたけれども、幕末における長州藩の言議には疑はしいものがあつた。殊に長井雅樂や福原越後など老臣の態度には怪しむべきものがあつた。かの元治元年七月十九日に國老たる益田福原國同の三人が兵を率ゐて禁闕蛤御門を侵したのは、名は毛利家の寃を訴へるといふに在つた。けれども見ゆるすことの出來ない事變である。この變があつてから、毛利家は深く謹慎したけれども、幕府は輩下騷擾を詰問すべく、八月三日に長州征伐の令を發し、尾張大納言をして兵を率ゐて西下せしめた。長藩は三老臣に自殺を命じて其の罪を謝したので、總督

尾張大納言は其の異心なきを察して大阪に還つたのに、やがて長藩が主戰に決したので、慶應元年四月十三日には再征を決し、その十一月七日には毛利敬親父子の罪狀を糺問せられ、翌年五月一日には敬親父子に對して蟄居減封を命ぜられたが、長藩が命を奉じないので、同じ年の六月には幕府は更に問罪の軍を發した。然るに、幕軍は連戰して利あらず、七月二十日に將軍家茂が大阪に薨ぜられ、九月十六日には勅諚によつて征長軍を停止せられたのである。この間に在つて、孝允らは如何なる振舞を演じつつあつたであらうか。

長藩は幕府に忌み嫌はれること甚しく、或日幕兵が長藩の京都河原町邸を襲はうとするや、をりから孝允は密に邸中に潛んで天下の形勢を探らうとして居たが、長兵は敗れて長州へ逃れ去つた。けれども、孝允は尙いまだ京を去るに忍びず、北に隱れ南に隱れして幕夷の眼を掠めて居た。

この頃京都の三本木に孝允の相知つて居る歌妓まつ子といふ者があつた。この松子は敏慧にして俠氣に富んで居たが、孝允の國事に奔走するのを見て、深く相結託し、頻に之を庇護した。幕夷の長州人を逮捕するに急なるを知つた松子は、禍の孝允に及ばうことを恐れ、住居の引越に見せかけて、孝允を柳行李の中に潛ましめ、加茂川の橋下なる乞食の群に投じて、三日三夜も踪跡を晦まし、

幕吏の逮捕を免れしめたなど、流離困頓の中にあつて貞順の操を全うしたといふ。これが後の木戸夫人である。

とかくする間に、孝明天皇は崩御あらせられ、慶應三年正月九日明治天皇が踐祚し給ひ、十月十四日には德川將軍慶喜は家康このかた久しく相傳へて來た將軍職を朝廷に奉還したので、天下の形勢は忽ち大に變じて、十二月九日王政復古の大令が渙發した。ここに賴朝以來七百年間の武門政治が潰崩して、天皇親政の日本が恢復したわけである。この日總裁、議定、參與の三職を置かれ、總裁には有栖川熾仁親王、副總裁には三條實美公が任命せられ、孝允は總裁局の顧問となつた。眞日本の陣容は大體整うて來た。

孝允は活眼の士である。是より天下の形勢を觀、國家の後事を察して、列藩が割據して居ては天下の事は統一し難いものだと考へた。時に長藩の老公は山口に居られた。そこで孝允は許を得て國に歸り、侯に見えて進言した。

今や天下は一變して、幕府は最早倒れて仕舞ひました。かうなつたのは自然の勢です。天

下の耳目といふものは掩ふことは出來ませぬ。今もし復古の爲に活動した雄藩をして、天下は取つて代るべしといふ念慮を抱かしめるならば、暴を以て暴に代へるもので、たとひ一旦は天下を有することが出來ても、人心は直に離れ、折角復古の事業を成した功績も地に墮ちて仕舞ひませう。今日の事は大義を明にし名分を正すに在ります。――そも〳〵毛利家の先祖であつた大江廣元公は、源頼朝を輔けて覇府を鎌倉に創められましたが、當時王室が萎微して國家を統御するに足らないものであつたから、その皇室を離れた政策を建てられたのも、深い思慮から出たことでありましたらうと思はれます。けれども、世論といふものがありまして、廣元公の政策を非難して止みませぬ。――中興の祖元就公は是と見る所を異にして、忠義を朝廷に捧げて居られます。今や閣下は既に天下に先だちて義を唱へられ、遂に各藩が聯合して、皇威を振起することが出來ました。今にして名分を正すといふ一事に努力せられますならば、これ大にしては國家滅裂の源を絶ち、小にしては家門の寃を雪ぐこととなりませう。閣下の御意は如何あらせられますか。

孝允の辭は至誠より迸つて居る。侯は「如何すれば宜しいのか」と尋ねられた。これに對して孝允

は、

それは外ではありませぬ。今まで各藩の版籍は皆その朱印を幕府から受けて居ます。考へまするのに、國土は幕府の有ではありませぬ。しかも、その實情は恰も幕府から封ぜられて居る形になつて居ます。それで幕府と諸侯とが君臣の觀を爲して居たのです。名分の正しくないといつても、これほど大きい誤はありませぬ。今日において名分を正すのには、版籍を奉還することほど、急を要するものはありませぬ。――かくの如く一たび版籍を奉還したとて、未だ必しも眞に封土を失ふべきではありませぬが、その歸する處は、結局朝廷の直轄になるべきやうに導かなければなりませぬ。

と答へたのに對して、侯は此の意見を嘉納されて、孝允に其の畫策を命ぜられたといふ。かの明治元年正月に至り、山内少將、島津少將、鍋島少將、毛利宰相中將が連署して、版籍奉還に關して上書し、

――抑、臣等有ル所ハ、卽チ天子ノ土、臣等牧スル所ハ、卽チ天子ノ民ナリ。安ゾ私有スベケンヤ。今謹ンデ其ノ版籍ヲ收メ、是ヲ上ル。願クハ朝廷其ノ宜シキニ處シ、其ノ與フベキハ

是ヲ與ヘ、其ノ奪フベキハ是ヲ奪ヒ、凡列藩ノ封土、更ニ宜シク詔命ヲ下シ、是ヲ改メ定ムベシ。而シテ、制度典刑軍旅ノ政ヨリ、戎服器械ノ制ニ至ルマデ、悉ク朝廷ヨリ出デ、天下ノ事大小トナク皆一ニ歸セシムベシ。然ル後、名實相立チ、始メテ海外諸國ト並立スベシ。

の如き意見を献ずるに至つたのは、彼の畫策奔走の功が多きに居るのであらうか。大小三百諸侯も相繼いで奉還した。この畫策の實施は、たしかに明治維新の大眼目であつたと言つてよい。

明治二年七月に官制の改革が行はれ、太政官の中に參議といふ職を置かれて、副島種臣、前原一誠、大久保利通、廣澤眞臣が任ぜられたが、やがて孝允も其の班に加はつて、大政に參與した。この頃になると、鎖國攘夷の夢は殆ど全く覺めて、歐米の事情に通ずる必要を感ずるに至り。明治四年十月八日外務卿岩倉具視を特命全權公使と爲して、歐米を巡回せしめられたが、孝允は大久保や伊藤や山口などと共に副使として外遊し、六年九月十三日に歸朝した。二年間の外遊は、彼等をして外國の長所を採り我が國の短所を補ふの緊要なことを深く感ずるに至らしめた。

これらの使節が歸朝して見ると、國内には征韓論が喧しい。參議西鄕隆盛、副島種臣、江藤新平後藤象二郎、板垣退助らの諸豪は征韓の必要を主張して居る。孝允は征韓を不可とし、兩々痛論し

たが、十月二十四日征韓論が敗れたので、之を主張して居た西鄕隆盛らは憤然として故山に歸つた。そこで孝允は岩倉や大久保らと相謀つて、政務を處理して居ると、佐賀の反亂が起り、國内が多事で皆現當局に對する不平黨の夥しきを示して來た。これより先臺灣人が我が漂流人が劫掠侵害されること度々に及ぶので、また廟堂内に臺灣征伐の議が起つて來た。孝允は國内の事を處理するの急要な時に當つて、遠く異域に征討軍を遣はす遑はないと爲し、征討不可論を提出したが、當局者が人心を外に向けしめる必要上から、七年四月四日臺灣征伐の議を決したのを見て、孝允は遂に職を辭して東京を去つた。

この臺灣征伐は陸軍中將西鄕從道の指揮によつて行はれた。これに對して清國が抗議して來たので、大久保利通は辨理大使として北京に赴き、談判數回にして清國を陳謝せしめ、償金として清銀五十萬兩を得て、十一月に歸朝した。利通が横濱に歸着し、その汽車に乘りて東京へ向はうとする時、遽しく車中に書面を投げ入れた者がある。利通が直に之を披けば、

日清が葛藤を生じたのは、眞に國家の大事である。これ自分が日夜心配して、殆ど寢食にも安んぜざる所である。然るに、今や圖らずも兩國間の風波が激せず、穏に其の跡を收めたのは、

是誠に貴下の賜である。その功績の大なるは、後世に至つても沒し去ることはあるまい。自分はまづ三千有餘萬の公衆に代はつて、その功勞を謝する。——

といふ意味を書き列ね、その奥に木戸孝允と記してあつた。利通は此の書面を見終へて感歎に堪へず、孝允が國事を憂慮する情の切なるを推賞して、

木戸が斯う言つて吳れれば、自分は實に嬉しい。今は何も憂とするに足らない。——政治上の事に至つては、自分は木戸に遠く及ばない。今より後、政務は木戸に一任し、自分は何も敢へて關係せぬ事にしよう。

利通の胸中には木戸を信頼する情が大に動いた。これが謂はゆる大阪會議を開くに至つた動機かといふ。

大阪會議とは如何なることぞ。大久保利通は帝國の內治を修め整へることが緊要であると考へ、それには木戸と提携せねばならぬと思ひ、參議伊藤博文をして其の意を孝允に通ぜしめた。八年一月十日に至つて、孝允は大久保、伊藤、板垣らと大阪に會して、政務に關する商議を開いた。井上馨の元勳調停策に基いたもので、薩長土の立役者が今後における芝居の打ち方を談合したのだ。これを大阪會議といふ。この會議には西鄕隆盛は招に應じなかつた。この會議の結果、木戸は板垣と共に政府に入ることになり、やがて政府は元老院を設置するに至つた。また我が國に民權自由の說が盛になつたのも、この頃の事である。

然るに、この頃また對朝鮮事件が起つた。それは明治八年一月二十日のことで、我が軍艦雲揚號が朝鮮江華灣において其の島人に砲擊されたのである。ここにまた問罪の議が喧しくなつた。孝允は其の事に任じて、みづから之を辨理しようと請うた。けれども孝允は其の頃病魔に犯され、下腹に充血し、脚筋の收縮となつて歩むことも出來なかつた。依つて十二月になつてから黑田淸隆と井上馨とを朝鮮に遣はして、江華島事件を談判せしめられた。

これより先、朝政の運駕が大阪會議で申合せた所と大に齟齬するので、島津久光と板垣退助とは廟堂を去つた。孝允は病床に在つて大阪會議以來の事を回想し、大に慨嘆して、遁世の志を起して居た。九年三月に黑田井上が使命を果して朝鮮から歸朝したので、孝允は國家の大事が一先づ終了を告げたのを聞いて、參議を辭し、內閣顧問となつた。とかくする中に、孝允の病氣は平癒し九年四月十八日には、天皇は孝允の染井別邸に臨幸あらせられた。孝允に對する聖寵の優渥なるこ

と此の如きを見て、世人は之を無比の光榮とした。

孝允は漸進立憲の首唱者である。時に東國諸縣に民衆の蜂起するあり。西國に熊本の亂あり、秋月の亂あり、萩の亂があつて、新政の喜ばれぬ形勢が見えるので、孝允は地租改正の急施が不可なる事を最も苦慮した。九年十二月に鹿兒島縣令大山綱良から、鹿兒島縣士族は他府縣士族と其の事情を異にするを以て、便宜の處分を請願して來た。或は特別處分に贊成する者もあつたけれども、孝允は公平を缺くのは爲政の本意でないとて、不贊成を力說した。孝允が憂國の情は眞に切なるものがある。けれどもその議する所は衆と相合はない。ただ大久保利通とは肝膽相照す所があつた。

たま〳〵鹿兒島叛亂の報が來た。當時鹿兒島は勢力の隆昌なのを以て、みづから全國の平均を破り、世人もまた鹿兒島の平安を以て天下の平安の如くし、動もすれば政府をして公平を失はしめようとする所があつた。孝允は常に之を憂へて居た。今や其の叛亂の報を聞き、切に奏して、輦を京都に駐め、征討の詔を發し給ひ、かつ身を以て征討の任に當らむ事をお願ひした。この時の孝允の胸中には、

近年自分は多病だけれども、一志の存する所は毫も人に讓る所はない。今この征討の任に當つ

て、薩軍の砲彈に薨れたならば、却つて至大なる愉快であらう。——

といふ存念があつたのである。かくて、大久保や伊藤と共に京都に留まつて、行在所を保護し、賊徒追討の謀議に參して居た。然るに四、五月の交に至つて、宿痾が再發し、遂に肝臟肥大症と變じた。病の漸く强まつて來た時には、天皇も軫憂し給うて、侍醫に其の側を離れざらしめられたが、蘭醫シウルは東京醫學校から來診し、軍醫監佐藤進は大阪陸軍病院から馳せ來た。

五月十九日車駕が孝允の寓居に親臨あらせられ、孝允が恐懼して褥を下らうとすると、天皇はこれを止め、懇に慰問して還御せさせ給うた。二十五日には勳一等に叙し、旭日大綬章を授け給うたが、二十六日に遂に薨じた。年四十四。天皇は侍從鍋島直彬を旅寓に遣はされて、痛悼の聖意を傳へられ、正二位を贈り、金幣を賜ひ、靈山における葬儀には特旨を以て儀仗兵を附け給うたが、更に明治三十四年五月二十二日には從一位を贈らせ給うた。孝允世に在ること四十四年、曾て放縱な惡戯少年であつた者が、豹變して此の光榮なる史傳の持主となつた。想うて此處に到れば、毅然たる大志を立てることの肝要なのを知られるのである。

孝允は常に幼時の腕白を悔い、名節の念を忘れず、榮辱に遭ふ毎に、忽ち亡父母を追思し、朝夕その靈前に額くことは、十餘年間も一日の如くであつた。性能く恩に感じ義を思ひ、賢を敬ひ才を愛し、朋友故舊に對して篤厚であつたのは、永く風神俊邁の人を想望せしめる。その病急にして死に瀕した時、囈語して「西郷もう好い加減に止めんか」と叫んだといふのは、頗る悲壯な挿話である。

『木戸孝允文書』といふものを讀めば、彼の性格と文藻とを窺ふに足るものがある。詩文も上手なれば、書も上手である。

安政元年は孝允の二十一歳の年である。その秋良敦之助に宛てた書中に、

楠公孔明之輩を始め、間斷なく御探索有之度事

貧民御救の御手段何方にも相立て置かれ候樣願候重任の者才智纔に乏しくとも必正直にして

忠義厚くし聊も私のなき者御撰み有之度事

小卒と雖正直且才能有るものは御用ひの事

などの語があり、また同年六月十日秋良に與へた書面の中に、

一千壯士磨二刀槍一、　日夜赴然待二蠻航一、
男兒不レ思家鄕事、　陣營梅雨讀二兵書一。

といふ一詩がある。その待蠻航と讀兵書とが面白い。萬延元年三月佐野竹之助らが井伊大老を刺殺したことを孝允が友人に通知したる書中には、

敷島の錦の御旗捧げ持ちて皇御軍の先駈ぞせむ

といふ歌が記されてゐる。歌の詞は拙いと言はなければならぬけれども、尊王の精神の脈々たるを見ることが出來る。

去歳千軍逼二我彊一、　今朝孤劍入二他鄕一、
浮世萬事變如レ夢、　一片依然男子腸。

は明治戊辰の歳に作つたもので、幕軍の長州を征したのが變じて、長軍が征幕の役に活動するに至つたことを感慨したものである。孝允の作で稍長大なのは、

世情元是有二異同一、　治道動易失二始終一、
天地育レ生無二偏私一、　日月照レ物自至公。

千山花薫長春節、　萬木葉染高秋風、
四時循環豈徒爾、　世人難レ解造化功、
爭二小利一兮失二大利一、　誇二微功一兮誤二全功一、
嗚呼千歳一時實此際、　興廢尤思二我帝邦一、
微力難レ奈報二今日一、　半生空蒙二殊恩一洪、
一點名利害二家國一、　方寸只應レ戒二我躬一、
慕二思師友一骨半朽、　接面交朋意難レ通、
癡迷獨憐大道迂、　蹉跌常恐孤愚忠、
酸辛知否世味美、　眞味却在二無味中一。

といふので、思想の頗る深遠なるは、まさに孝允哲學を聽く感がある。この詩には「大政一新之歳有感」と附記されてゐる。この戊辰の春彼は東京に出でて、

世の中は櫻も月も涙かな

といふ俳句を口吟した。彼は多情多恨の士であつた。もつとも家康以來覇を唱へて傲然と構へられ

て居た江戸城が官軍の手に收められた頃であるから、花の爛漫たるには砲煙かかり、月の淡々たるにも彈雨の痕あるが如きを見ては、誰も涙なきを得なかつたであらう。その彼が京都に潛伏して居る元治元年四月の頃、

皐月闇あやめ分たぬ浮世の中になくはわたしと鵑

と歌ひ出た境地に對しては、むしろ微笑を禁じ得ぬものがある。

清流迫二戸外一、　四壁皆青山、　聽レ水思二琴瑟一、
對レ雲忘二世間一。

もまた其の前後の作か。これには木香山中の作とある。風神高逸の彼が想ひやられる。一篇の詩歌も雲に翔る龍身の鱗片である。

（六）西郷南洲

英雄とは何の謂ぞ、豪傑とは何の謂ぞ。我が國の偉人を傳する者は、必ずまづ西郷南洲を屈指して、これを英雄と稱し、これを豪傑と讃する。明治維新の際には活動した人物が頗る多かつたが中に、その三傑として、誰しも大久保利道と木戸孝允と西郷南洲とをかぞへる。しかも、大久保利通とは如何なる事業を爲したる人物かと問ひ、また木戸孝允とは如何なる事業を爲したる人物かと問うたら、能く之に答へ得る者幾人ぞ。この二人物を崇拜する者に至りては、實に至つて稀であるといつても甚しい過言ではあるまい。それにもかゝはらず、西郷南洲の事蹟は三尺の童子も割合に能く記憶して居り、事蹟を知らぬ者まで、之を英雄の標本の如く、豪傑の代表者の如く崇拜私淑して居る樣に見えるのは、そも〳〵何故であらうか。

世に英雄と呼ばれ、豪傑と稱せられる程の人物は、いづれも天稟の偉才ある者で、剛毅不撓の資性を具へて居る。これがまた幸運にも、風雲の機に際會して、その精彩を煥發すれば、言ふ所は花の如く、行ふ所は月の如く、みづからは其の美たる所以を知らず、その善たる所以を知らずとも、

能く人目を炫耀するに至るのである。

南洲の詩にも、「幾歷辛酸志始堅」と言つて居るが如く、度々の艱難辛苦に遭へば遭ふほど、殊に能く英傑の資性は發揮せられる。功成り名遂げたる英傑も、驕慢奢侈の順境に入れば、やがて凡人化するが多い。それゆゑに、顯榮なる地位を保つたまゝ終焉を告げたる英傑は、時人後人の同情が少く、崇拜私淑せられることも亦少い。これに反して、敵黨敵國から攻擊せられ討伐せられ、或は災厄困頓の中に憤死し悶死した者は、時人後人の同情が多く、崇拜私淑せられることも亦多い。

順境は人を凡人化し、逆境は人を英傑化した例が少く無い。藤原道長の如き、足利義滿の如き、德川家光の如き、その輪郭は大きいけれども、遂に凡人視せられることを免れぬのは、この例であらう。藤原氏に忌まれて太宰府の謫所に悶死した菅公や、兄頼朝に疑はれて中尊寺畔の露と消えた義經や、意見用ゐられず刀折れ矢盡きて湊川に討死した楠公などをして、花笑ひ鳥歌ふ春の如き太平無事の日に生れしめたならば、よくあれ程の盛名を後の世に傳へ得たらうか。

更に想ふに、項羽が垓下に漢軍を鏖したならば如何。文文山が元軍を江西に全滅せしめたならば如何。岳武穆が秦檜の害に遭はなかつたならば如何。ハンニバルが羅馬に窮追せられて自ら毒死

したのや、ケーザルが陰謀者の兇刃に貫かれて議事堂に斃れたのや、ナポレオンが列國の冷酷な監視を受けて大西洋中の一孤島に淋しい最後を遂けたのなども、千古の奇才が史を讀む者をして同情の涙に堪へざらしめる好例である。

また更に近い例を見るのに、哈爾賓停車場内の一彈は、伊藤公の傳記に多量の豪傑色を添へたのである。麻布新坂町における一刀は、乃木將軍の生涯に少からぬ英雄味を加へたのである。

しかしながら、末路のあはれなのみを以て、時人後人の崇拜私淑を受けるものではない。もし末路のあはれな點から言へば、紀尾井坂で刺客の難に遭うて斃れた大久保利通と、城山の岩崎谷で朝敵といふ醜名の下に敗死した西鄉南洲とに幾何の軒輊があらう。然るに、世の崇拜私淑が大久保に薄くして、西鄉に厚いのは、これ何故であるか。

北條早雲が嘗て寺僧に六韜三略を講說せしめた時、その「主將之法務攬三英雄之心」といふ句に至つて、「もう止めよ。我既に之を得て居るから」とて、また說かしめなかつたといふ譚は、誰しも能く知つて居る所である。

南洲の語に、「漢學を爲したる者は、漢學につきて、道を學ぶべし。道は天地自然にして、東西の

別なし。『春秋左氏傳』を熟讀し、助くるに孫子を以てせば、萬國對峙形勢に通ずべし。」とある。早雲は戰國の一武將たるに過ぎなかつた。けれども、南洲は明治維新の元勳として、邦家の命運をも一身に支持せむずる覺悟を有して居た。夙に王陽明の流を汲み、福昌寺の住持無參に就いて修禪しなどして、精神を鍛錬して居たので、その一言一行は能く人の心を動かした。彼の「人に推すに公平至誠を以てせよ。公平ならざれば、英雄の心は決して攬られぬものなり。」とか、「天下後世までも信仰悅服せらるゝものは、たゞこれ一箇の眞誠なり。」とか謂つて居るのを以ても、その修養の程が窺はれるのである。

嘗て高島呑象から聞いたことがある。「私が逢つた人物の内で大久保さんほど恐い人はない。大久保さんが人に對して言ふ語が三つあつた。それは「よろしい」、「いけませぬ」、「考へときませう」といふ三語である。」と、これ必しも大久保利通の全豹を知ることは出來ぬけれども、その一斑は慥に察せられるものである。

この大久保利通と同じ町内に生れた南洲は、また是と大に性格を異にして居た趣がある。彼の性格には秋風肅殺たるが如き方面は少しもなく、春風駘蕩たるが如きものでなくば、暑熱炎々たる

夏日の如きものであつた。その早く青年時代に郡奉行所の小吏として窮民の慘狀を憫んだ彼は、藩の高崎騷動には正義黨に贊同して「余は寧ろ忠死の列に加はることの出來ないのが口惜しい。」と、屠腹者の血に染んだ襯衣に取りすがつて悲泣痛哭するに至つたのである。

薩主齋彬侯をして「私家來多數あれど、間に合ふものがない。西鄕一人は貴重な大寶だ。」と歎稱せしめた彼は、江戸の水戸邸に藤田東湖と會つて、その識見人物に推服し、神戸の海軍練習所に勝海舟と相見て「勝先生にはひどくほれ申候」と感服し、一たび月照と相許した時には、共に相抱いて海中に投ずるをも厭はなかつたのである。その意見は、勤王の大藩が連合して王室を補翼し國是を一定するといふが如き堂々たるものでありながら、一同志の窮苦に同情して、竟に偕に死を企てるに至るなど、その情誼の濃なることは、むしろ驚かれるではないか。彼が征韓論に敗れて、故山に歸養し、はては門下生に推されて朝敵の名をも避け得なかつたものは、狂したのでもなく、窮したのでもなく、この性情より生ずる必至の結果である。この理智を超越したる詩的行動は、南洲の人格をして捕捉し易からぬまでに尨大ならしめ、漠然たらしめ、英雄的ならしめ、怪傑的ならしめ、以て人の崇拜私淑を集めて居るのではあるまいか。

薩摩人は慓悍である、勇武である。賴山陽が「衣至骭、袖至腕、腰間秋水鐵可斷。」と賦した兵兒謠は、薩摩人の勇悍なる風貌を詠じたものであるが、實は島津義久の家老新納武藏守忠元の作つた俚謠に基いたのである。この忠元といふ人は、四書七書を諳んじ、詩文をも能くし、『古今集』の祕傳をさへ受けた程の雅人であつた。その和歌に心を寄せることは甚だ厚く、戰場に露營しながら、火繩の光で歌集を耽讀するに至つた。此の人が關が原戰爭の時、薩摩の北境を守つて居て、將士を勵ますために、

肥後の加藤が　來るならば
焙硝ざかなに　團子會釋
團子は何團子　鉛團子
それでも聞かずに　來るならば
首にかたなの　引出物

といふ俚謠を作つたのが、山陽の詩に譯出せられたのである。一藩の驍將であつて、露營の夜も歌

集を耽讀するとは、その執心なこと人をして歎稱を禁ぜざらしめるものがある。

かくてこそ、箭を帶びたる壯夫の錘を荷ふ田夫と相交はる中から、八田知紀を出し、高崎正風を出して、明治の歌壇には薩摩人の貢獻が少く無いのである。南洲は漢詩人である。然らば、西鄕南洲は歌人の中に數へられる資格がないであらうか。

幕吏の追窮が嚴しくして、天下の廣きも身を置くに處なく、安政五年十月十五日の月あかりに海上遠く漕ぎ出でたる月照と南洲、大崎が鼻沖に水煙立たせて身を投じた莫逆の情は、果して如何であつたらう。救ひ上げられて見れば、一人は既に絕命し、一人は漸く蘇生して、思ひも寄らぬ大島のわび住居、慷慨は胸に滿ちたれども、都や關東の形勢は、時たま便船ごとに待ち聞くばかりである。萬延元年二月、大島から大久保利通等に贈つた書中に、

天下の形勢漸く衰弱之體、實に慨嘆の至に御座候。橋本迄死刑に逢候儀、案外悲憤千萬難堪時世に御座候。

此の一ヶ年間、豚同樣にて罷在候故、何卒姿を替へ、走出でたく、一日三秋にて、御呼返之期相待居候。……

とあつて、その奥に、

思ひ立つ君が引手のかぶら矢は
ひと筋にのみいるぞかしこき

一筋にいるてふ弦のひびきにて
消えぬる身をも呼び覺しつゝ

孤島貶謫の鬱屈は實に察しやられるではないか。これより先、井伊大老の威壓政治は主上をも關東へ移し奉るであらうとの風說を生じて、人心は恟々たる有樣であつた時、南洲は慷慨のあまり

東風吹かば花や散るらむ橘の
香をばたもとに包みしものを

と詠んだが、今は我が身の上になり、玆に兒童の手習讀書相手をして、幽愁の月日を送り迎へた。春蘭秋菊幾たびか變轉して、朝風暮雨が彼の詩情を動かしたこと幾何ぞ。

英主齊彬薨じ、その遺志を繼ぎたる久光は、南洲を大島から召還したので、羽翼新に生じたる南

洲は、京阪の間に奔走して、朝權の復興と幕府の倒滅とを畫策したが、異論者の誣ひる所となつて忽ち久光の怒に觸れ、またもや德島に配所の月を眺める身となつた。德島に自活の計を立てようとして、留まること兩三月、更に沖の永良部島に遷された。南洲は從容として命を受け、始終獄裡に安座したとのことであるが、成經 俊寛の昔の夢に異ならぬ生活には、燕去り雁がね來る空模樣にも、都のたより如何にと、心を惱ましたであらう。幸に警護の獄吏が情ある者で、同志の書面を渡してくれたから、形勢の大體に通ずることを得た。當時、公武合體黨が京都に勢力を得ては居るけれども、勤王の思想が天下に磅礴し來たる形勢を看て取りたる南洲は、孤島謫居の間にも、

みだれたる糸のすぢ〳〵繰返し
いつしか解くる御代となりけり

と微笑をもらしたこともあつた。この島に操といふ島役人が居つて、南洲の精神を察知して欽慕したので、南洲も之を愛して居た。

操ぬしの重きおほやけ事の使に
選まれて船出するを送るとて

君がため深き海原ゆく船を
あらくな吹きそしなとへの神

諸人のまことの積る船なれば
行くもかへるも神やまもらむ

と詠んで與へたのを見ても、その關係を知ることが出來る。また獄吏土持政照も南洲の心事に感奮して、種々力を添へようとした。與土持政照と題して、

別離如レ夢 又 如レ雲、 欲レ去 還 來 淚 紛 紛、
獄 裡 仁 恩 謝 無レ語、 遠 渡二波 浪一瘦 思レ君。

といふ詩が、當時の事情を洩らして居る。また此の島に在つて人に語つたものゝ中に、

一家の親睦を計るには、世人は多く人倫五常の道を言ふ。然れども、是は當然の看板のみにして、今日の用に益なく、怠惰に墮ち易し。速に手を下すには、慾を離るゝこと第一なり。一つ美味あれば、一家擧つて食し、衣服を製するにも、必ず良きを長にゆづり、自己を顧みず互に誠を盡すべし。たゞ慾の一字より親族の親みも離るゝものなれば、其の根據を絶つこと肝

要なり。さすれば、慈愛自然に離れざる樣になるものなり。

云々とあるなど、村夫子の語のやうではあるけれども、情味を以て人を化する彼の性格が髣髴として現れて居る。

「題知らず」なる、

閨の戸にひとりや人の待ちぬらむ
　立ちわかれゆく横雲のそら

は如何なるをりに詠んだものであらう。

平生蘭交分外清、　今朝有レ約已斜陽、
倚レ門倚レ戸相俟久、　春夜長二於秋夜長一。

といふ詩と共に、彼の豪宕不羈なる性質の中にも、まことに人なつかしげなる心情が沸きかへつて居たことを想ひやられるではないか。

彼はまた不平憤懣の間にも、忽ち快活洞開の曙光を見出し得る人であつたらしい。

結ぼれし心のこほり解けやらで

春ならぬ春に春は來にけり
これ氷雲に鎖されたる庭園にも、既に梅の蕾のふくらむを見、鶯のさゝ鳴を聞くものではないか。

故郷の谷間を出でし時鳥
　みやこのそらを月の夜にせむ

の如き、

上衣はさもあらばあれ敷島の
　大和にしきをこゝろにぞ着る

の如き、いづれも此の點から彼の性質を吐露したものと見ることが出來る。彼の歌人的生活は、多くは此の流謫中にある。けれども、征韓論に敗れて故山に歸養したる彼、獵犬を携へて山に遊びたる彼、私學校の校主としての彼、戰敗れて岩崎谷の洞中に籠りたる彼、みな闇黑の中に一道の光明を看開いてゐたるもので、彼の偉大なる、漠然たる、英雄的なる、快傑的なる點は、また此處に存するのである。鹿兒島は決して虎を養つたり豺を養つたりする處ではなかつた。

(七) 大久保利通

曾て鹿兒島に遊んで、その城山に登つた。城山から鹿兒島灣を瞰下し、櫻島を眺望するのに、灣水は碧にして瑠璃を溶したるが如く、島影は緣にして琅玕の簾を懸けたるが如くである。自分は坐に淸快を感じて、おのづから「是は佳い景色だ。この佳景は英雄兒を養ふに足る。」と叫ばざるを得なかつたが、足一たびこゝを去つて西鄕南洲らの墓を弔へば、また嗟嘆を久しうせぬわけに往かなかつた。利通も虎を養はず豺を養はざる鹿兒島の地に生れ、南洲等と共に此の山水に養はれたもの。今この利通を叙するに當つて、まづ曾遊を追憶し、當時の感懷を呼び起して、うたゝ一種の哀愁に堪へぬものさへある。

大久保利通は、初の名は利濟、通稱は正助、後に市藏と改められたが、みづから甲東と號して居た。鹿兒島藩士大久保次右衛門の子である。もとより群兒に卓越して、幼少にして夙に和漢の學を涉獵した。嘉永三年に父が藩の事から罪を獲て、鬼界が島に流されたので、記錄所書役助であつた利通も免職となり、仕途に就くを禁ぜられて居ること四年にして、禁が解けた。當時藩主齋彬は鋭

意を以て治道に熱中せられて居る折柄、利通の用ゐるに足るものであるを看拔かれ、西鄕隆盛と共に擢られて徒士目付となつた。

齋彬は賢明で、夙に王室に忠誠を捧げる志深く、幕府の失政を非難し、一世を匡救しようと欲して居た。けれども、その志を成さずして、安政五年に薨じたので、齋彬の弟久光が藩主を補佐し、將に大に爲す所あらうとして居たから、利通は其の近侍に托して時務を建白する機會を得た。

文久二年三月、久光が鹿兒島を發して京都に赴かれるのに從うて、京に上り更に江戸に出た。この頃朝幕の間が事毎に阻隔して居たが、利通は小松帶刀らと東西相通じて、公卿や諸侯に勸說する所あり、四方の志士と相結んで、周旋畫策する所があつたので、是より利通の名頓に揚がり、薩藩の威力も頗る重きを加へた。

是より先、長侯毛利敬親は幕府の譴を獲て、藩に幽閉されて居たが、その家老たちが大兵を率るて京都に上つて强訴したので、禁闕を守る諸藩の兵と鬪うて敗走した。幕府は長兵の禁闕を犯したのを咎めて征討軍を長州に遣した。長藩は三家老を殺して罪を謝した。然るに、幕府は意に滿たぬ所ありとて、再び征長の軍を起さうとするので、利通は再征の名がないのを力說して之を拒んだ。

こゝに面白い挿話がある。或日幕老が利通を召して、長州へ出征すべき命令に應ずるやうにと懇諭した。利通は之に對して聾を裝ひ、朝廷が幕府を討つ者と爲し、佯り愕いて曰はく、

幕府に罪があつて征討すべきであるにしても、我が薩藩は兵を以て之を討つのは、情誼の忍びざる所であります。けれども、御命令である以上は、敢へて弊藩の君公に御命令を傳へぬわけには參りぬせぬ。

幕吏は更に大聲を以て之を辯じ聞かせたけれども、利通は之を聞かぬ眞似して退出したといふ。幕府の長州再征には薩藩の兵は出陣しない。諸藩も多く形勢を觀望して出兵を躊躇して居る。天下の物情は喧囂を極めて居るのみであつた。その中に將軍家茂が薨ぜられたので、幕府は喪に托して兵を罷めた。利通の權略を用ゐるのは、この類である。

これより利通は益々中山、近衛、三條、岩倉の諸卿に親近し、國事に對する祕策を献じた。岩倉公が嘗て朝譴を蒙つて、岩倉村に幽居する時の如きは、利通は人知れず番兵を附けて公を警護させて置いた位である。その頃、幕府の威望は大に衰へて來たが、會津桑名の二藩は朝憲を蔑如し、專ら意を幕府の衰運を挽回するに用ゐた。利通は長藩に至りて、藩主父子及び木戸孝允らに面し、大

に談議する所があつた。そこで朝廷は藩長二藩に密勅を下し、兵を擧げて幕府を討たしめるに決したので、利通は小松帶刀や西鄕隆盛、それから長人廣澤眞臣らと連署して、倒幕の命を奉じ、部署は已に定まつた。然るに、この時大將軍慶喜は上奏して政權を奉還するに至つた。これ實に慶應三年十月十四日の事である。

是において、朝廷は勤王の諸侯を召集して、善後の策を立てられることになつた。利通は馳せて鹿兒島に下り、內旨を傳へて、藩主の入朝を促し、今や天下が薩藩の態度に屬目して居るから、至誠を以て感動せしめなければならぬとの意見を具陳した。けれども、將軍辭職の奏請は聽許されたのではなく、將軍は大兵を擁して闕下に留まつて居り、朝廷は未だ天下を總攬する實を擧げることが出來ず、論議は區々として一定する所がない。利通は京に還りて、かゝる千歲一遇の好機を失つてはならぬと、反覆切論して朝議を決するに至らしめたのは、維新史上特筆すべき大功績である。

新に三職が置かれた。議定には、

仁和寺宮　嘉彰親王
山階宮　晃親王

中山忠能（公卿）
正親町三條實愛（公卿）
中御門經之（公卿）
德川慶勝（尾張侯）
松平慶永（越前侯）
淺野茂勳（安藝侯）
山內豐信（土佐侯）
島津義久（薩摩侯）

が任命されたが、山內豐信侯は德川慶喜をして朝議に參與せしめるのが至當だと聲言し、諸官も之を然りとした。これを不可としたのは、利通と岩倉公と薩侯とだけであつた。不可論者の抗辯は頗る力があつたので、容堂も遂に屈した。

德川慶喜は此の時大阪に在留した。それが將に帝京に入らうとして居る。會桑の兵士は續々北上をはじめた。慶喜の反狀が著しくなつて來た。明治元年正月三日薩長の兵は會桑の兵と伏見鳥羽

で會戰するに至つた。有栖川宮熾仁親王は征討大將軍として、錦旗節刀を持し、禁衛の軍を指揮し給うた。幕兵は遂に潰走した。利通は實に征討軍の參謀であつたのである。

四月十一日には江戸城が官軍の手に歸した。七月十七日には江戸が東京と改稱された。利通は大阪遷都論の首唱者である。幾ばくもなくして、天皇は詔を下して親征あらせられるに至り、車駕は一旦大阪に幸せられたけれども、二年三月二十八日都を東京に遷されることに決定したのは、利通が遷都を立論したのに因る。また利通は版籍奉還に關し、郡縣制度の制定に關して、立案畫策したことは擧げて數へることは出來ない。

明治四年十月、岩倉具視の全權大使として歐米に差遣されたのに際して、副使として隨行し、六年九月に歸朝した。この時我が國內には征韓論が勃發して居たのに對して、この新歸朝者は齊しく反對說を同執した。西鄕隆盛らは我が主張の貫徹せぬのを憤つて、職を辭して故山に歸臥したので、利通も參議を辭したけれど、之を免されず、却つて內務卿兼務を命ぜられた。

七年四月四日には征臺の事があつて、利通は全權大使の命を蒙り、北京に渡つて、淸國軍機大臣恭親王、大學士文祥らと總理衙門に會見し、往復辯論すること七回に及んでも、淸廷は誠意を示さ

ないから、利通は斷然として國旗を捲いて去らうとした。駐清英國公使トーマス、ウエードが居中調停するありて、清國も漸く征臺の理由を認め、償金五十萬元を納れて和を講ずるに至つた。

彼は維新の大業に關して、終始木戸孝允らと廟堂に立つて共に參畫したが、大阪會議の場合や西南戰爭の場合には頗る苦境に立つたもののやうである。西南戰爭が平いだ時は、功を賞して勳一等に叙し、旭日大綬章を授けられ、正三位に陞進せしめられた。利通は如何に恩遇に感激したであらうか。

木戸孝允は病に逝き、西鄕隆盛は反亂に斃れ、秋風落寞の感はあるけれとも、利通は最より內治に全力を集注しようと焦慮して居た。明治十一年五月十四日、邸を出でて參朝しようとして居る處に、たま〳〵福島縣令山吉盛典が訪ひ來た。用談が果てて、山吉が辭し去らうとする時、利通は山吉を暫し引き留めて、

この頃、地方官會議の席上でも、意見の一斑は披露したけれども、我が輩の意見はあれで盡くしたといふのではない。幸に君が來て吳れたから、その言ひ殘した所を披瀝しよう。——中興の業は之を完成するのに、およそ三十年は懸かる。之を分けて三期とする。第一期は、戊

辰より今年に至るもので、兵馬倥偬、內外多事で、我が輩は內務を管して居たけれども、まだ何一つ出來上がつたものはないから、大に慚かしく思つて居る。しかし、その第一期は既に過ぎた。第二期は今後の十年間だ。變亂が漸く平いで、內治が將に興らうとして居る。これは最も緊要の時期で、我が輩の諸君と共に努力しなければならん時期だ。第三期になると、第二期の事業を承繼潤色する後賢を待つより外はない。我が輩の素志は以上の通だ。——およそ地方官たる者も、この第二期の最重最難たる事は了解して居られる筈だ。國力を養ひ、士民を安んずるのを以て自ら任ずる以上は、愼んで輕卒な行動のために害を民衆社會に貽さないやうにされたい。——

云々と演べられたので、山吉は大に感激して暇乞した。利通は直に邸を出て途を淸水谷に取つた。途中で之を要擊した者があつた。それは石川縣出身の政論家島田一郎を始め、長連豪、杉本乙菊など六人の刺客が喰違門內なる紀尾井町において、車上なる利通に飛びかゝり斬り附けたのである。馭者中村太郎も亦殺された。

兇賊は斬姦狀を懷にして、やがて官に自首した。この首犯者たる島田一郎は、戊辰の役に金澤

藩兵として北越に出戰し、下士から累進して大尉まで上がつた者であるが、藩兵解除の後は金澤の忠告社に入つて政論に從事し、明治十年の西南戰爭には兵を擧げて之に應じようとさへして居た。その中に隆盛は敗死し、亂平いだものだから、政柄を專にして西鄕を殺すに至つたのは大久保內務卿であると速斷し、士民抑制の謀主を除かうと企てたのである。利通が此の兇變に遭つたのは、山吉と別れてから僅に半時ばかりの後であつたといふ。

利通の兇變に遭つたことが天聽に達した時には、天皇は大に震悼あらせられ、右大臣正二位を贈り、金幣を賜うて、厚く弔ひ給うた。彼は享年四十九。明治三十四年五月二十二日には特旨を以て從一位を追贈された。墓地は靑山南町に在る。夫人は早崎氏の女、名は倍子、四男一女を生み、側室由子の生んだ所と合せて九人ある。第二子牧野伸顯が最も著はれて居る。

利通は外剛にして內和の人、事を爲すには持重を主とし、綿密にして泄さず、必ず熟慮反覆して後に發し、時機已に到ると見れば、勇往直進して、少しも遲疑した跡は無い。その趣味としては、圍碁と詩歌とであつた。鹿兒島の變報が始めて來て、將に西上しようとする時、片手に電文を讀み

片手に石を下して、心も手も共に少しも亂れなかつたのは、人の好話柄とする所である。

明治八年の冬は例の江華島事件で世間紛擾の時であつたが、詩人甲東は閑を得て、沈々たる夜氣を圍碁に味はつて居たことがある。

寒燈挑盡夜沈々、　雪敲閑窓和棋音、
誰識殿中有妙趣、　爭心元是屬無心。

大宮人は暇あれやである。この人は昨冬十月には臺灣事件について淸國に使し、談判に對する淸國の誠意がないと見ては、蹶然として國旗を捲き歸らうといふ猛威を示した人である。その淸國に向つて進む首途の時であつたか、

長風破浪一帆還、　碧海遙回赤馬關、
三十六灘行欲盡、　天邊始見鎭西山。

といひ、和議漸く成つて、意氣揚々として歸朝の途に上つては、

奉勅單航向北京、　黑煙堆裏蹴波行、
和成忽下通州水、　閑臥篷窓夢自平。

と口吟したので、この詩は彼利通の揮毫したものを處々で見たことがある。その得意は想ふべきである。けれども、彼には謙抑の美德があつた。

迂生未レ有二尺寸功一　叨辱朝恩禁闕中
早晚尋レ賢成二夙志一　深山何處訪二英雄一

といふ詩や、前に記してある福島縣令に對する談話によつて、その性格を察することが出來る。島田一郎輩の如く彼を奸物視するのは、過刻である。

殊に彼の詠歌としての

嵐山咲き匂ひたる花蔭に
今日をさかりとうぐひすの啼く

鶯の聲遙にもなりにけり
春のゆくへをたづねてや啼く

うち霞む花の上なる春雨は
霽れぬ先より長閑けかりけり

ひまもなく降り懸かれども青柳の
いとにたまらぬはるの雪かな

に至りては、木戸松菊よりも、西鄕南洲よりも詞藻に富んで居る彼を見るべく、柳櫻をこきまぜたる春の錦に包まれて樹下に佇んで居る風流士を髣髴し來るではないか。兇賊が短慮にして、彼に借すに今十年の月日を以てしなかつたのは、返すがへすも惜しい事である。

(八) 岩倉具視

城南なる品川の近郊に海晏寺といふ佛刹がある。境内の丘陵には樹木繁りて、初夏の綠葉は玉を綴り、晩秋の紅楓は錦を飜すので、常に逍遙の客が絶えない。高燥にして閑寂なる丘上には、中央に岩倉公具視、左には松平侯春嶽、右には寺島伯宗則の墳墓がある。岩倉公が此處に墳墓を築かれたのは、由來がある。岩倉公は非常に孝心深く、父君が生前常に海晏寺の楓葉を觀たいと希望しつつ、しかも果さずに世を終へられたので、公は甚だ遺憾とし、海晏寺中の地を相て、父君を葬られ、自身もまた父君の墓前に同じ寸法の墓を作ることを遺命せられたのである。先年「歌人としての岩倉具視」を稿するつもりで、まづ其の墳墓を弔へば、しきりに懷舊の情を催して、まことに辭し去るに忍びないものがあつた。

岩倉公の生涯は、あまり波瀾に富んだものではない。堀川康親の第二子と生れ、岩倉具慶の養子となり、天保九年に十四歲で元服して昇殿を許され、安政四年に三十三歲で侍從となつてから、明治十六年七月二十日に五十九歲で薨去せられるまで、とにつけかくにつけて皇室と國家とのために斡

旋盡力して居られたのである。かくの如きは、搢紳有職の家に生ひ立つた人の事蹟としては、尋常普通の事である。けれども、その資性が俊邁剛毅であるからに、公武合體の說を贊襄して、佐幕黨の妄物だと誤られ、明治維新の大業を翼贊して、神武復古の大義を成就し、非征韓論を强唱して、少壯過激の徒に要擊せられた三大史實の顚末には、和宮の降嫁や、岩倉村の蟄居や、朝幕の興廢や志士の活動や、幾多の悲劇喜劇が前後に配合せられて、舞臺は頗る變化と趣味とに富んで居る。しかも、この劇の前後を通じたる主人公が岩倉公であると見る時は、公は一世の視聽を一身に集める所の一大花形役者であると言はなければならぬ。

岩倉公は明治維新史中の一大人物である。政治家としての岩倉公が、當時の公卿なる近衛、三條久我の諸公より一頭地を抜き、雄藩の主たる島津久光、毛利敬親、山內容堂、鍋島閑叟、松平春嶽の諸侯を壓し、天下の豪傑たる大久保利通、木戸孝允、西鄕隆盛の輩を顧使するが如き威重を具へて居たのは、その精神氣魄の高潔雄大であつたばかりでなく、識見技倆の更に卓拔であつたからである。殊に維新の功臣にして晩節を全うせぬ者の少からぬを慨いて、「我こそ大臣たる者の標準を示さう」と聲明せられた心の奧には、言ひ知らぬ光輝が籠つて居る。

されば、明治天皇の御寵遇は頗る篤かつた。公が病魔に襲はれて苦んで居られた時、天皇は侍醫を遣はして診察せしめ給ひ、かつ天皇御親ら其の邸に臨ませ給ふこと二回、その薨去するに及んでは、御哀惜に堪へ給はず、勅して太政大臣を追贈し、國費を以て葬式を行ひ、廢朝三日を仰せられるに至つた。かくの如く御信任の厚かつたのは、やがてまた公の人格事業の大なることを證據立てるものである。更に之を其の詠歌によつて視る時は、金玉殿裡の花の時、錦の帳の下に侍り、岩倉幽居の雨の夜、草の庵の中に物思ふ公の情緒が、花により、雨によつて、隱れる所もなく吐露せられて居るのである。

公が侍從となられた時、皇室は幕威の抑壓を受けて、何事も缺乏がちに渡らせられたが、ある日聖上の御詩情が動いて、筆硯を左右に命じ給うたのに、左右は短冊すらも供へ奉ることが出來ぬのを見て、公は慨嘆悲憤に堪へないで、その夜潛に所司代本多美濃守の門を敲いて刺を通じたところが、所司代は大に怪んで、「何故の御入來か。」と問うた。公は左右を屏けて、御用度不足の御有樣を縷述し、談半にして潸々と泣いた。所司代も大に感動し、私金若干を献じて、萬一を裨補し奉つたといふことである。

互市開港の勅許を幕府が奏請したのに對して、搢紳八十八人が連署して、沮止した一事は、朝幕の間に幾重の阻隔を生じて、國家のためには、甚だ憂慮すべき形勢を示して來たので、遂に一部の憂國者をして公武合體說を唱へしめるに至つた。公もまた此の說を主張して、和宮東下の事あるに至つた。けれども、これがために鎖國攘夷を決行するには至らないので、公らの心事を疑ふ者が出來て、公は朝譴を蒙り、やがて籠居落飾すべき命を受けては、恐懼して措く所を知らず、

いかさまに思ひわきてもかこちても
なみだのみこそ降り增りけれ
今はとは思ひきれども黑髮の
亂れてすぢもわかれざりけり
勅なれば髮は斬りもし剃りもせむ
きよきこころは神ぞ知るらむ

その無念さ、悲しさ、歎かはしさは、如何ばかりであつたらう。公の詩人的生活は、此の頃より始まつたのである。

文久二年八月二十日に勅勘を蒙りて、しばしは都に留まられたが、九月十三日の夜ひそかに西賀茂なる靈源寺とて先祖代々の墓ある精舍に身をかくし、十月八日更に岩倉村の民家に移り住まれることとなつたのである。洛北岩倉村は、鞍馬山の南、比叡山の西北にあたつて、賤山がつの棲處を以て目せられてゐる八瀬大原にも劣るまじき山間僻地である。罪科もない公が此の山間僻地に蟄居して不遇の月日を送られた心の中は如何であつたらう。

はじめ勅勘を蒙りては、寢るにも寢られず、寢れば怪しい夢を結んで、心更に落ち居ず、

さま〴〵の夢こそ見ゆれぬる間さへ
人にかはれる我が身なるらむ
國にむくい君につくせる眞ごころの
却りてまがとなる世なりけり
いつまでもかくてなげきの蔭にのみ
身のなるはてを思ひつづけむ

味氣ない浮世かな、今年の秋は軒の松風も庭の蟲の音も異なる樣に聞きなされて、閏八月の初旬に

は病むといふ程にはあらねども、臥處を起き出るのも物憂げであるから、家族親族の人々も氣づかうて、歌の會など催して、公の憂欝を慰めようとした時、公の詠まれたのは、

人訪はで籬は野らとなるままに
我が世がほにもすだく蟲かな
この秋は我が蓬生の庭にのみ
よる〳〵蟲のなくかとぞ聞く
あはれいかに小倉の山の木がくれに
我がごと鹿も音をば鳴くらむ

もしも此の愁の忘れられるものならば、都の中を立ちのいて、千草花咲く嵯峨の奥にも隱ればや。かく思ひつつも、ひたむきに打籠りて、家君、妻子、奴婢一人二人の外は絶えて對面もせず、たま〳〵訪問する客をも辭して、うち〳〵の人どもが月の中に三の日と八の日とに歌の會などして居られたのに、なほ公が陰謀をめぐらして居るとの噂が立ち、一族なる通禧朝臣の懇なる忠告もあつたから、西賀茂なる靈源寺に忍ぶ事とせられたのである。

折よく伯父なる僧の來り給ひければ、その衣を借り着て、從者一人を具して、いと力なく、ひそかに家を出ぬ。酉の刻ばかりなりければ、名におふ今宵の月はいと明らけきも、いぶせく覺ゆ。松が崎を離れ、大德寺に出で、野路の草葉を打拂ひ、しばらく休らひ居て、

夜深くも草葉の露にそぼちつつ
あらぬ野やまの月を見るかな

戌の時すぐる頃、かの寺に至りぬ。讀經の聲は聞ゆれども、ものまうといふに答ふるものなし。今にや勤行の終りなむと、堂の傍にただずみて待つほどに、

思ひきや住みなれし宿をよそにして
くさのおくなる月を見むとは

秋の夜の今宵いかなる今宵にて
ひとり野でらの月を見るらむ

かくて、寺僧は懇に勞りもてなしたけれども、「子過ぐる頃打ふしぬ。しかはあれども、夜もすがら寢ねやらで、こし方の事、また父君の御上、妻子の事ども思ひつづけて、涙更にとどまらず。」など、書きおかれたる水莖の跡に、公の苦惱も推し測られる。

靈源寺に留まる間、祖先の墓前に頽づきては、

奉るあかの清水のきよきにも
無き名はそそげ代々の親たち

勤の鐘の音をききては、

山寺の鐘はひまなく響けども
うき世の夢はさむべくもなし

など詠み、やがて剃髪しては、更に垂れ籠めて、打ふさいで居られるから、寺僧は之を慰めるとて釜などかけ、茶をすすめなどするので、公は、

松風の音を內外にきくのみぞ
わが山ずみの友にはありけり

木立ふり巖こけむしとにかくに
うき世のそとの心地こそすれ

など、みづからも慰めては見るけれども、更闌け人靜になれば、心いよ〳〵澄み來りて、我が身の上の思ひ出でられ、かくばかり丹誠を盡して仕へ奉つて居たものを、何故の寃罪ぞ、何故の讒誣ぞと、臥して思ひ、起きて思へば、いつしか胸も痛みて、

ともすればふりさけ見つつ久方の
雲居ばかりぞながめられける

と呟かざるを得ぬのであつた。

然るに、ここも久しく留まるべき場合でないといふので、またもや北山なる民家の某かたに移らねばならぬこととなつたが、岩倉村といふ名こそ、我が家の名と同じで、なつかしいけれども、家には人が住まなくなつてから幾年たつたものか、狐狸の棲處とばかり荒れに荒れて、膝を容れよう處もない。

忘れては夢かとぞ思ふ現には
あるにもあらぬ笹ぶきのいほ
めづらしと人はみやこの初雪も
つもるうき身は向ふともなし

訪ひもしつ訪はれもしつる友垣の
雪までが心を惱ます種となるのである。しかも、この家にも久しく住まれぬこととなつては、あはれ廣い天地の間にも唯身ひとつを置くべき處もないのかと、長歎大息して居たが、親切な僧の心づくしで、芝坊といふ坊に住まふこととなつた。

あと絶えはてて積もる雪かな
たどりつつ分け來し日より道芝の
露わすられぬなさけなりけり
かき曇りしぐるとすれど濡れざるは
うべこそおほへ峯のかさまつ

都を出でてからは、誰一人訪ひ來る者もなく、皚々たる峯のしら雪、白き心をあかすに術もなければ、積る思は雪と共に彌增すのみである。

よそにのみ見てはすぎこし北山の

雪のふかさを軒に知るかな

遺愛寺の鐘は枕を欹てて聽き、香爐峰の雪は簾を捲げて看る昔の夢も、今は我が身の上になつた。

されど、聞くにつけ、見るにつけても、心いよ〳〵泰からず、身ます〳〵寧からずして、

たどる〳〵北山遠く分けしより
しぐれは紬のものとなりぬる

人は花を待つ頃となつても

しげりあふなけきの蔭に獨居て
はな待つとしもあらぬ春かな

春來れどなほ山風のふきすさみ
わが住むさとは雪ぞちりける

里人のあそぶさまさへ目なれねば
いよ〳〵春のこころともなし

と打沈み、煩悶懊惱のはては、

いつまでかかくてふるやの板庇
久しとたのむいのちならぬを

かくばかりうき名取川流れても
竟に澄む瀨のありぬべきかは

と失望し、

今はわれ世にうみはてぬ麻の緒の
長かれとこそ身をねがひしか

と落膽し、

恐しき世にこそありけれ捨小舟
人をのりても身を立てむとか

など、世をも人をも怨みがほになられたのは、同情に堪へぬ境遇である。

さりながら、此の國歩艱難の時に當つて、大丈夫たる者が何時まで泣いてばかり居られよう、悲んでばかり居られよう。殊に公が胸中には一片耿々たる忠君愛國の至誠が輝いて居る。蟄居して居

ると云つても、やがて諸藩勤王の諸士とは密々の往來が始まつた。水戸の香川敬三、長州の杉孫七郎、江戸の大橋順藏などは、心肝を傾注して岩倉公の説を賛し、公のために援護の勞を執り、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、小松清廉、坂本龍馬などとも氣脈を通じ、中山、三條、中御門の諸卿とも議を合はすに至つては、幽居の身ながらも、堂々たる一個の重鎮となつた。ある時ひそかに大久保利通のやどりに訪づれて、

賤が屋に身は垢づきて住めれども
　なほ煤けぬはこころなりけり

との一首を示されたこともあつた。藤田東湖の「自驚塵垢盈皮膚、尚餘忠義埋骨髓。」と同じ心である。また利通が音づれて、肴など贈りくれた返禮に添へて、

何かいはむ身は沈むとも水上に
　立ちかへる波のさわぎと思へば

といふ詠を示されたこともあつた。その井上石見に與へられた歌、

垂れこめて執る身ならねど物部の
　こころの眞弓ひかぬ日もなし

また留雲に與へられた歌、

あめ地のそき立つきはみ照すべき
　この日の本のものふやたれ

といふが如きは、まことに公の剛健雄偉なる性格と確固不動なる自信とを發揮したものである。

公は岩倉村に蟄居して、みづから友山と號し、清閑なる山を友として、風月の情を養ひ、詠歌に徒然を慰めて居られた樣だ。けれども志士との往復が斯く頻に行はれたから、内外の形勢を知るには何等の不便もなかつた。殊に特筆しなければならぬのは、玉松操との關係である。玉松は幼年の頃醍醐寺に入つて、法名を猶海と號し、大僧都法印にまで任ぜられたが、慷慨の性、皇室の式微を看過し奉るに忍びず、大國隆正の教育を受けるに及んでは、密に恢復を以て念とし、東西に奔走し、近江國坂本の茂國寺に隱れて居たのを、寺僧が岩倉公に紹介したので、公は一見して奇とし、蟄居の一室を貸し與へて同居せしめ、腹心とせられたのである。神武復古の經綸が此の主人公と此の食客との間から湧き出たのを見れば、此の臥龍窟こそ明治維新の大策源地であつたと云つても、

過言ではあるまい。玉松もまた歌を詠んだ。山居と題しては、

松かげに流るる水を友と見て
ひとり起き臥す庵のすずしさ

相撲には、

すすみ立つ今日の拔出のかたはらに
人ありとしも見えぬにはかな

早春竹には、

見どころもなき竹なれど鶯の
初音聞くこそをかしかりけれ

の如き瀟洒なる風韻は、また其の素朴恬淡なる人物を想見するに足るではないか。

岩倉村について今一人憶ひ出されるのは、藤原藤房である。建武の昔、藤房は時の帝に幾度も諫言を奉つたけれども、君遂に御聽納もなかつたから、伯夷叔齊が潔き跡をふんで、北山の岩倉に韜晦し、

住み捨つる山をうき世の人とはば
あらしやにはの松にこたへむ

と詠じて、終に再び世に出なかつたといふことである。三條實美公その意を諒とし、

そのかみをおもへばかなし山深く
入りけむこころ人なとがめそ

と、はるかなる後の世より辯護して居られる。それとは、やや事かはつて、岩倉具視公は一旦岩倉の閑山水を友として居たけれども、雪寃の情しばらくも止まず、

拂ひ見よ紅葉における白露も
あかき玉にはまがふなりけり

かつは報國の念、久しい蟄居に堪へず、

武士の心の眞弓ひきつれて
放たれたるはあなうらやまし

など詠じつつ、時機の到來を待つて居たが、慶應三年正月に先々帝御卽位ありて、大赦が行はれた

時、京都に入ることを許されたので、小松帶刀や、寺村左膳や、後藤元燁や、大木民平などの有志は、公の許に來往して、後事を議したのであるが、後の內閣總理大臣大隈重信伯も大隈八太郎として當時度々公の許に出入したのである。公の王政復古說は是等諸有志の承諾贊成する所となつて、遂に十月十五日には德川將軍の印綬を解かれるあり、一方には三條公らを召還し、長州侯の罪を免じ具視公もまた勅勘を免され復飾を命ぜられて、皇謨を翼贊するに至つたのである。想ふに、朝廷久しく政權に遠ざかつて、幕府の政權返上に遭うては、上下共に擧措に迷ふ所があつたらうに、公が岩倉から出て復古の經綸を督勵したのは、諸葛孔明の草廬より出て照烈皇帝の大業を翼贊したのよりも優つて居る。

公ははじめ攘夷論者であつたが、內外の形勢を知るに及んで、開國論者となり、廣く知識を世界に求める計を執り、明治四年七月には外務卿を拜命し、十月には進んで右大臣兼特命全權大使となり、大久保利通、伊藤博文、山口尙芳などを隨へて、橫濱よりまづ米國に航した。太平洋の煙波縹渺たる間を橫切る際、

大海に漕ぎ出でて見れば此の船も

うかべる葦のひと葉なりけり

と詠みなどして、米國に上陸し、各地を視察し、更に太西洋を渡つて、歐洲を巡遊したのである。當時、米國は南北戰爭の後を承けて、雨降つて地固まる情態であり、歐洲は普墺戰爭や普佛戰爭を經て、プロシア、オーストリア、フランス、ロシア、イギリス、イタリアの諸强國が覇を爭つて居り、十九世紀の文明は絕頂に達して居たのである。公らは是等諸國を歷訪して、その政治、法律、兵制、風俗を觀て、ほとんど眼を奪はれたことであらう。殊に一世の豪傑たるビスマルクや、チエールや、グラツドストンや、ゴルチヤコフなどが剛毅果斷の政治を行つて居るのを見ては、おのづから偉大なる感化を受けて歸朝したことであらう。公が太政大臣代理に任ぜられた時、非征韓論を强硬に主張して、西鄕隆盛や、江藤新平や、前原一誠らを憤らせたのも、さる經驗を積んで居ることが、大に力を爲したであらう。

公の急務とする所は內治の整理にあつた。公の非征韓論は少壯血氣なる反對派の血を沸かせた。明治七年一月十四日の夜、公が赤坂の離宮を退朝して馬場先の邸へ歸らうとし、馬車の喰違に差しかかつた時、武市熊吉、武市喜久馬、山崎則雄、島崎直方、下村義明、岩田正彥、中西茂樹、中山

泰道、澤田悦彌太の徒、馬車を要して、不意に公に斬りつけた。あはや、公の命は三尺の霜降に脆くも消え去らうとしたが、公は纔に跳つて堤を躐え濠に投じて遁れることを得たので、

燒太刀のときつるぎはの霜の上を
ふみ渡りてものがれけるかな

白波のうちたるあとは殘れども
岩がねのみはうごかざりけり

霜がれのそのくずかづら一すぢに
かかるいのちは神やまもれる

と詠じて、神明の加護を喜び謝したのである。越えて四年、殆ど同じ所なる清水谷で大久保利通は參朝の途すがら島田一郎らに刺殺された。利通曾て偶成の詩がある。

迂生未レ有二尺寸功一　叨辱二朝恩一禁闕中
早晩尋レ賢成二夙志一　深山何處訪二英雄一

この詩の意は、遭難の朝も來訪者山吉盛典に物語つた程で、甲東の志も窺ひ知られるのに、忽ち

形見の言葉となつたのは悲しいと、岩倉公が知人に談されたといふことである。一は參内の朝に露と消え、一は退朝の夜に闇を破つて辛き命を助かつた互の運こそ怪しいものである。

非征韓論が勝利を占め、佐賀の亂もさほどの大事に至らずに鎭定したので、明治九年六月には天皇の奥羽御巡幸が行はれた。公も御供して各地をめぐり、大に詩囊を肥やした。日光に到り、將軍某が三の峯を眺望したと言ひ傳へる所で、

富士筑波二荒の峯もおしなべて
今日こそ君がみそなはすなれ

信夫山のほとり阿武隈川を渡りて、

君が代にあふくま川を渡るかな
かねてしのぶの山をみつつも

安達が原、宮城野の原も田畑と開けたのや、中尊寺における源義經の遺物、壺村における壺のいしぶみ、いづれも詞花言葉の種とならぬはなかつた。此の御巡幸は東北人民のいたく歡迎し奉つ

た所で、御道すがら貴賤の人々が歌を奉つたのを一卷に作り、『埋木花』と題し給ひ、公にも歌奉れと仰せられたので、

埋木の花咲く御代となりにけり
　黄金も今や實をむすぶらむ
もが川藻にうづもるる埋木も
　雲居の花とあふがれにけり

と詠んで叡覽に供したといふことである。皇化邊陲に洽くして、上下和睦したる情狀は、まことに國運隆興の瑞徵である。

やがて、熊本の亂、萩の亂、つづいて西南の騷動もあつたけれども、これも久しからずして平定したので、またも明治十一年八月三十一日より、北陸道の國々を御巡幸あり、西京に到り、東海道を經て還幸あらせられた。この時も公は御供して、前橋に往つたのに、そこの士族の娘どもの生絲繰る態を見ては、

もののふの荒木の弓も君が代は
　手引のいとにひきかへてけり

と時勢の推移を想ひやり、木曾路の所々に橋を架けて道路の便利よくなつて居るのを見ては、

川といふ川には橋をかけてけり
　渡りやすくもなれる御代かな

と文明の普及を祝したので、村景野色も山容水態もみな其の吟興を鼓せぬものはなかつた。

一身を國家に捧げて、政務に鞅掌したる公は、
　信濃なる木曾の山路をたどる間も
　おもひつづくる朝まつりごと

と詠まれたほどであるけれども、さすがの剛毅も病氣には勝ちがたくして、伊豆の熱海に湯治する時、福岡孝悌におくられた歌には、

世の中をわするるとにはあらねども
　やま靜かにも住めば住むかな
わきていづの大湯の鹽のいかなれば